月刊ナイトバグ　笹飾り投稿短冊型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2009年7月号
切り絵、なぞなぞ…アイデア投稿★
ぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷに
新企画！月別テーマ「グルメ」
季節と関係ないお題を出したら、
あらぬ方向にも展開したでござるの巻

Dimarcatin

QED EX

蟲姫さま
ひばち

また必ず逢うがよい。

KERO
神様対象

caved!!!!

月刊ナイトバグ　2009年7月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

今度のリグルは超ツヨカワイイの(はぁと)　mimidori …… 2p

りぐるん！　のーと …… 4p

パッチェさん元気ですね　羅外 …… 5p

リグルの挑戦ー前編　壁々 …… 6p～8p

蟲の願事　～1話～　社 蛍夜 …… 9p～11p

不気味な影と想いの行方　夏樹 真 …… 12p～18p

月別テーマ「グルメ特集」 …… 19p～39p

- テーマイラスト …… 19p～24p
  (緑 / 貴キ / くらげん / ara / モ誠幹 / 怒羅悪)
- 夢オチは人類最高の手抜きオチだ！　社 蛍夜 …… 25p～26p
- 蟲の手帖　HOUSE …… 27p～32p
- りりかる☆りぐるのすわっと一品　言示弄 …… 33p
- 無題　草加あおい …… 34p～35p
- make a cook　毒粗 …… 36p
- リグると！　ひどぅん …… 37p
- コレハヒドイ　戌亥 …… 38p
- グルメ（性的な意味で）　凡用人型兵器 …… 39p

ほたるこい　第３話　はね～～ …… 40p～48p

リグル・ナイトバグ　夜行 …… 49p～50p

リグルレース　くろと …… 51p～53p

イラストレーションズ …… 54p～69p
(ADDA / foxtrot / 熾天使 / KAGOKAGO / 草葉 / 天。/ 涼音 奏 /
まるく。/ たーく / キッカ / ZT / P.O / オワタ / Jade / てつ)

リグル達の七夕　怒羅悪 …… 70p～71p

無題　草加あおい …… 72p～73p

パチュリグな日々　東 …… 74p～79p

合羽リグル　図隅 …… 80p

リグなぞむし　mimidori …… 81p

リグリグ日記　神楽 祐希 …… 82p～83p

冒険者なヒトたち外伝（そとづて）
あっきゅん道場第一話　～ただし魔法は尻から出ない～　ハンダゴテ …… 84p～87p

リグルとあの景色　MAL …… 88p～94p

漫画、自由作品、表1～表4　作者コメント …… 96p～97p

編集後記 …… 98p

ゲルセミウム・エレガンス　わぶ …… 99p

ねぇねぇ
一緒にコンサート
開かない？
軽音部だよ
けいおんぶ！
このマンガの
タイトルも
軽音アニメを
パクってるのよ

え…？
別にいいけど
私ぜんぜん楽器
弾けないよ？
「ん」しか
合ってねぇよ

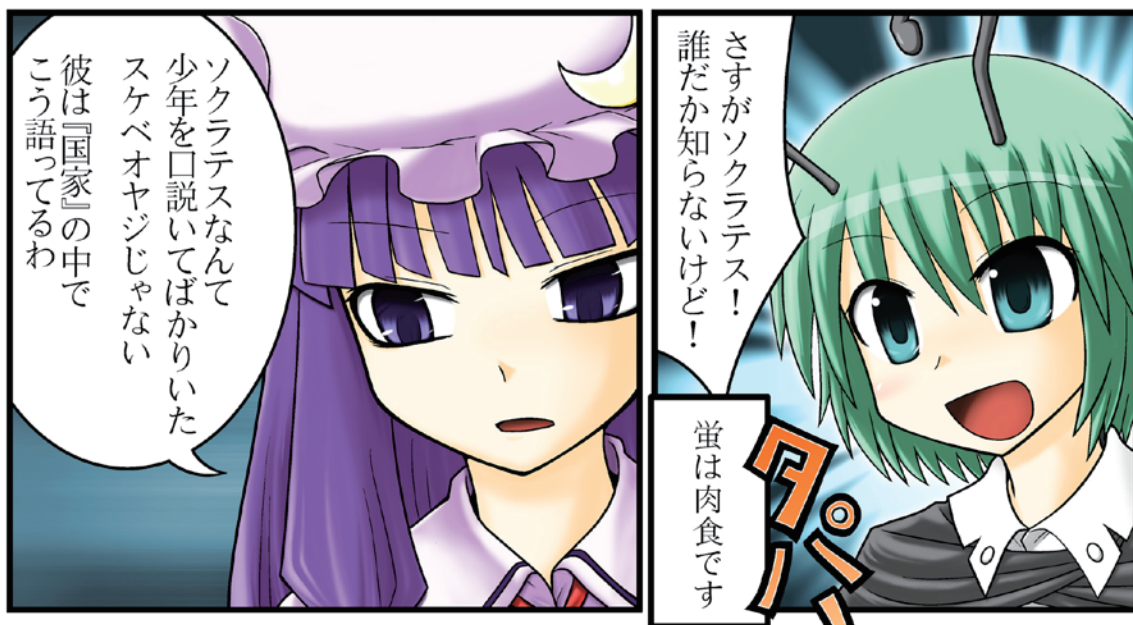
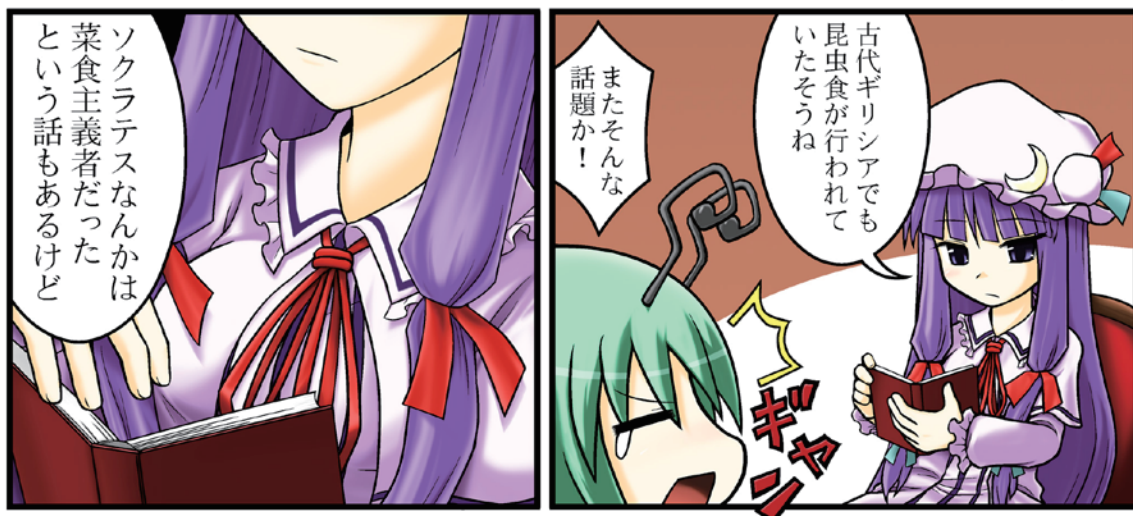
虫の鳴き声
綺麗じゃん？
りぐるんも
きっといい声
持ってるよ
う～ん
なき声か…
ちんちん
ちんこ
言うな

少女想起中…
豊富な
涙目
アーカイブ
……

たしかに私 よく
泣いちゃうけど
いつも涙目だから
声は出ないよ？
いやいや
そっちの泣くじゃ
なくてね？
『鳴』の方の
鳴き声よ
なるほど
鳴き声ね…

「いい声で鳴けよ
男の子!!」
ゴゴゴゴ
「らめぇ」
さすがにこの本を
18禁にするわけにゃ
いかないよ…
恐怖の記憶多いよ
リグルさん!!
…というお話。
？

パッチェさん元気ですね

羅外

つづきません。

リグルの挑戦　―前編

著者：壁々

「ここか…よっと。まだ慧音は来てないみたいね。」

　いよいよ夏本番を迎えようという頃。日差しは暑く、たまに吹く風は心地よい。気の早い蝉が声を張り上げている。

　人里から少し離れた位置にある空き地。人気も妖怪の気配も希薄なさびれた場所である。それゆえ、悪い人間や妖怪が密会をすることが多い場所である。なぜだが今日、リグルは慧音からここに呼び出されていた。

　ほどなく待っていると人里のほうから特徴的な人影が近づいてきた。

「あ、来た来た。おーい。」

「すまない、待たせたようだな。」

「いやいや、気にしなくていいよ。で、相談って？」

「簡単に言うと、お前に人間を襲ってほしい」

　蝉の声が響き渡る。それなのにリグルは広場に静寂を感じていた。

「………………はっ？」

　思考が固まる。口がぱっくり開いて戻らない。だれあろう人里の守護者、上白沢慧音から放たれるもっともありえない言葉。

「…突拍子もない話ですまない。まぁ、事情を聞いてくれ。」

「へっあ…へ？　あ、何？」

「とりあえず口を閉じろ。落ちつけ。実は今度、寺子屋の子供たちと少し山のほうに遠出しようと思っててな。目的として、妖怪の怖さを教える、スペルカードバトルを見せる、というのを考えているんだ。」

「……ああ、なんだ…そういうことか…。」

　最悪、里の極悪人を葬ってほしいみたいな話なのかと考えていたリグルはようやく肩をなでおろした。

「…でも、なんで私？もっと見た目怖い妖怪もいるよ？」

「ん…いや、稗田の求聞史記にな、お前は人間との友好度が悪いと書いてあってな…」

「私自身そんな人間に対して冷たくした覚えはないんだけど…」

「落ち込むな。書かれてしまったからには仕方ないし、利用させてもらおうと思ってお前に頼もうというわけだ。ちゃんと報酬は出そう。」

「なるほどね…」

　別段、悪くはない話だ。ようは子供相手に暴れるだけの仕事だろう。慧音と示し合わせてやるのだから、そんな痛い目を見ることもあるまい。何より、妖怪のイメージを作る役を任された、というのがリグルのやる気を刺激した。

「うんわかった!やってあげるよ。」

「助かるな。遠足は一週間後だ。方角としてはあちらのほうに行くから探して見つけてくれ。まぁそんな見つかりにくい位置にはいな

いつもりだ時間としては昼過ぎあたりが理想だ。…おっと。大切なことを言い忘れていた。」
「ん？」
「報酬の条件だが、攻撃回数は少なくていいから全力でやること。子供は演技に敏感だからな。私も全力で子供を守るから、安心して全力でやってくれ。」
「…慧音は全力で守れば私の攻撃は止めれるの？」
「侮るな、人間を守るために私がいるのだからな。」

「ん～……」
　慧音と別れた後、リグルは釈然としない表情で飛んでいた。
「見下されているのはわかるんだけど、それ以上に…数は少なくていいってひっかかる言い方だな…。少なくていいってことは『多くてもいい』ってとれなくもないよね…。流れ弾でも子供に直撃すればただじゃすまないかもしれないのに。確実に人間を守りたいはずの慧音にしてはおかしい…気が……ん？　何かに引っ張られｔ」
　思考回路的にではなく、物理的にひっかかりを感じた瞬間、リグルの視界は暗転した。

「…ふぇ？　え！？」

　気づくとリグルは博麗神社の上空にいた。別に空中にいること自体はそんなに珍しいことではないのだが、問題は「自分で浮いていない」ことである。なにか大型の鳥の妖怪にでもさらわれたか、ああ私の人生も終わりかなぁ…とか考えていたら
「あらあら、走馬灯なんか見るより、もっと面白いものが見れるわよ？」
「へっ……あ…、あ……！！」
　正直、大型の鳥の妖怪にさらわれてたほうが幾分気持ちが楽だったかもしれない。リグルの隣にいたのは「あの」夜にうっかり喧嘩を売ってひどい目にあわされた最強の妖怪、八雲紫。今、リグルを支えているのは彼女がつくったスキマだけである。すべては紫のさじ加減ひとつ―リグルは口をあんぐり開けて本当に走馬灯の上演を始めようとしていた。
「こらこら、別に取って喰おうってわけじゃないのよ。」
「ふぁ…は…はい？」
「とりあえず口を閉じなさい。あなた、今さっき里の半獣から妙な依頼を受けたでしょ？」
「んっ…あっ…はい。」
「そしてあなたは気になった…あの半獣にしては不用心な言い方だと。」
「はい」
「その答えがもうすぐ聞けるわよ。」
「ここで…？」
「ふふ…ほら、来たわ」

　博麗神社。神社の境内は少し散らかっているが、打ち水がしっかりなされていて比較的涼しい空間となっている。掃除をするのは暑くてだるいが、打ち水は涼しくなるからしっかりやっているといったところか―相変わらずだらしがないと半ばあきれながら慧音は賽銭箱の隣で居眠りをしている霊夢に近づいた。
「霊夢」
「ん…ああ、あんたか…」
「昼寝中すまないと言う気にもならない境内だな。」
「厭味言いに来たわけじゃないでしょ？」
「うむ、先日の遠足の話だが、相手はリグルだ。」
「ああ…うん。なら大丈夫だわ。『人間に対して印象が悪く』『たとえ全力でも私が勝てて』『カッコよく決めれる』相手の条件にはぴったりね。」
「『大丈夫だとはおもうが』卑怯に見える勝ち方はするなよ？」
「私の亜空穴系の技のどこが卑怯なのよ…れっきとした技なんだから。」
「子供にはそう見えまい。」
「まぁ…『使うまでもないと思うけど』ね。」
「では一週間後だ。『里の人間のお前の株を上げるチャンス』なんだからしっかり頼むぞ？」
「私は仕事はちゃんとやるわよ？　さて…と」

「あと霊夢、やはり境内の掃除はちゃんとやったほうがいいと思うが？」
「ぐー」
「…やれやれ…」

「…というわけでした。」
「…ヒドイ…」
慧音が去った後の博麗神社上空では、スキマにもたれるように限界までうなだれているリグルがいた。あまりの凹みっぷりにさしもの紫も声をかける。
「期待通りの反応ありがとう。」
「…ひどすぎる…」
心配からではなかった。今にも溶けてなくなってしまいそうなほどうなだれるリグル。
「だいたい卑怯なのはそっちだよー。私と話してる限りでは慧音と1対1って話のように聞こえるじゃない。」
「彼女は『全力で子供を守る』と言ったわ。全力とは何も力だけではない。時間があるなら知略を働かすのも十分ありだと思うわ。」
「ていうか襲うもなにもこれじゃこっちが襲われに行くようなもんじゃん～。も～。」
ふてくされるリグル。無理もない。襲えと言われる相手には幻想郷屈指の妖怪退治の専門家つき。しかも、あらかじめただのやられ役と想定されている。おそらく報酬の割にあわない仕事になるに違いない。
「で、あなたはどうするの？」
「…ふぇ？」
「このまま、なめられっぱなしで1週間後にコテンパンにされたいのかしらって話よ。」
「そんなの…いやよ。けど…相手はあの霊夢でしょ？　どうするのよ…1週間で…。」
「私が聞いているのはできるできないではない。あなたは『どうにかしたいの』？」
リグルはその言葉に紫を見上げた。いつもと変わらぬ薄気味悪い笑みを浮かべていたが、確かにその顔から感じることができた。あなたがその気なら私がどうにかしてあげる、と。
「……したい！　です！！」
なぜ目をかけてくれたのかはわからない。だが、強くなれるのなら。霊夢を、人間を見返すことができるのなら—どんなことでもやってやる！
「ふふ。いいわ、そのやる気。ありがたく思いなさい。私があなたを霊夢に勝たせてあげる！」
「…で…何をするんですか？」
待ちきれないようにはりきって特訓の内容を聞こうとしたリグル。しかしその内容は。
「とりあえずあなたには一回死んだあと地獄までいってもらいたいところね。」
「…はい？」
「口は閉じといてね。じゃ、早速死んでもらうわ。」

…どんなことでも、という決意は生半可な覚悟でしてはいけない。リグルの本日の教訓。

（終）

〈作者コメント〉
待望のリグルバリバリ活躍SSです。といっても今月はまだですが…。するんですよ。ええ。乞うご期待！

蟲の願事　～１話～

著者：社　蛍夜

木陰から四人を覗く人影があった。
家からついてきているそれは、四人を監視しているように見える。
そんな時一人が大きな声で言う。
「そうか！　わかったわ！」
その言葉に反応して一人振り向く。
そしたらまた同じ一人から、今度は少し抑えた声で聞こえた。
「・・るのぐあい・・・てよ」
その言葉に他の二人も振り向く。
どうやら話に集中しようとしているようだ。
直前に三人が驚くような仕草を見せたので、何かに気づいたように思える。
その人影は軽く舌打ちしながらも会話を聞くために軽く身を乗り出した。

※※※

「リグルは・・・」
そうミスティアが言い出した瞬間ミスティアの後ろ、チルノ達の正面の木の影に怪しい人影が動いた。
「誰！⁉」
その人影にチルノが気づき、声をあげる。
人影はその声に反応したのか、逃げ出した。
チルノは逃げた人影を追い掛けようとする。
だが、急に走りだそうとしたチルノに、大妖精が急いで聞く。
「ちょ、ちょっと⁉　どうしたの？　チルノちゃん！」
「怪しい奴があたい達を見てたのよ！」
走りながら、チルノが答える。
チルノに置いていかれないように、他の三人も走り出す。
走りながらミスティアが聞く。
「で！　何で追い掛けるの⁉」
「そりゃ、逃げ出す奴は何か悪い事をした奴に決まってるからよ！」
ミスティア達は、合ってる気はするが、納得しきれないような表情だ。
そんな会話を続けていたら森が開けて、リグルの家の前に着いた。そこでチルノが足を止めた。
「ちょっと！チルノ！例の怪しい奴は何処行ったの⁉」
「・・・分からない」
「え！？」
「ここまでは奴が立てる音があったから追えてたのよ！」
「じゃあ姿は見てないの？」
「・・・逃げ足が早いから見れなかったのよ」
明らかな落胆の色、本当に見逃したようだ。
チルノにミスティアは、会話が止まり、自分達の息が切れている事に気付いたので、まずは深呼吸をする。深呼吸したからか気持ちが落ち着き、余裕ができた事で周りを見た。

すると、大妖精とルーミアが森の方を見ていた。なぜかと思いチルノが尋ねる。
「？　どしたの」
「なんか、森の方がざわついてる気がして・・・」
「森？」
　話を聞いたミスティアが森の方を向き、耳を傾ける。
　少し聞いていると、「ザワザワ」といった蟲の動くような音が聞こえてきた。
　その音にミスティアは更なる疑問と一緒に、少しの不安を覚える。
『疑問を覚えるのは仕方ないが、何故不安まで？』
　とミスティアが考えていたら、大妖精が思い出したように付け足した。
「そういえばこの音、走ってる頃からし始めてたよ」
「え？そうなの？」
「そーなのだー」
「あたいは犯人を追いかけるのに必死だったから気付かなかったわね」
　いつのまにか犯人扱いになっていた。三人とも『何のだよ』と心の中でツッコミを入れ、話に戻ろうとした。
　その時、近くの茂みが揺れ、ガサガサと音を立てた。その音に四人とも身構える。
「・・・誰？」
　チルノが茂みに向けて聞いてみる。
が、返事は無く出てきたのは
「なんだ、カマキリか」
　ミスティアが気を緩め、出てきた生き物の名前を言う。が、そのカマキリが次々と出てくる。
　群れとは違う、いわゆる「列」を成して進んでいる。まるで、チルノ達がいないかのように。そして、先頭のカマキリが大妖精の足元を通る。
「なっ、何⁉」
「何こいつら⁉　あたい達に気づいてないの⁉」
「まさか、蟲については私達じゃ分からないわ。リグルがいな・・・」
　いないと分からない、と言おうとしたときに思い出す。さっきリグルに言った言葉を
『・・・そうね。リグル、何かあったら虫でもよこして呼ぶのよ』
『うん、分かったよ』
「・・・これってもしかしてリグルが？」
「え？」
　ミスティアの言葉にチルノが反応する。突然言葉が切れ、次に出た言葉の言い回しから、不安が生まれたからだ。
　確認するかのように、チルノは尋ねた。
「リグルが・・・どうしたって？」
「私・・・リグルに何かあったら虫をよこすように言ったよね」
　返ってきた質問の答えは不安に満ちていた。『間違いだと言ってくれ』と言わんばかりの目でチルノを見ている。
　だが、チルノはその答えに嘘はつけなかった。いや、つきたくなかった。
「家に入るよ」
　少し強めに発音する。ここでうだうだしてるよりは早く確認しないと拙い事に成りかねない、だからミスティアの後押しおするためだからだ。
「行こう」
「・・・うん」
　四人が玄関に向かう、その間にも森の音は止まない。
　家の前に居たため、数秒で玄関の前に立つ。緊急事態と判断していたため、ノック等はせず中へと入る。そして、急いでリグルの寝室へと向かった。
「リグル‼」
「え⁉　あ、皆どうしたの？」
　布団から上半身だけ起こしてるリグルがいた。頭に手を当てていたが、皆が来た時に驚いて離れたので誰も見ていない。
　そして、どう見てもチルノ達を呼んではいないし、ましてや具合が悪くなったようには見えない。
　チルノ達はその場にへたりこんでしまった。
「あ！？み、皆大丈夫！⁉」
「病人に心配される筋合いは無いぃ～」
「あたい達を心配してる暇があったら寝てなさいよぉ」
「よかったよぉ、ほんとよかったよぉ」

困惑するリグル、そりゃ急に来てすぐに目の前でへたりこんでしまったのだ。しかも一人泣いている。
　オロオロするリグルにチルノが一つ言った。
「こ、腰が抜けて立てないから少し待って」
「あ、うん」

（終）

〈作者コメント〉
　あぁ、やってしまった、連載ss・・・
　書き貯めてる訳ではないからそのうち話が繋がらなくなるかもしれませんが、まぁ優しく見守ってください。
　さて、早めに次を書かないと。この長さで続けると長期連載になりかねないですからな。今回なんて夜なべして書き上げましたよ。ぇぇ、眠いですよ。『夜なべしといてこの長さ！』等のツッコミは受け付けれませんのであしからず。
　あぁっ！　こんな事書いてたらスペースg

幻想郷の何処かにある、誰の手も入っていない森の奥。
　本来ならば、そこは自然豊かで静かなはずの森だ。しかし、そこには不穏な影が敷き詰められており、その周囲の植物達は枯れていた。まるで、その影達が自然を食べつくしてしまったかのように。
　地面が見えなくなるほどに多い尽くされた謎の影。それらはまるで絨毯が生きていて、動いているかの様に不規則に蠢いている。
　不気味としか言い表せない、黒い影の正体。
　それは、無数の――――蟲であった。
　幾多の蟲が集まり、この黒い影を成しているのだった。それはまるで、一つの生命かのようにも見える。複数の個が集まり、一つの大きな個に擬態している感じだ。
　そこには、意思などあるはずは無い。あるはずがないのだが、しかし明確な目標があるかのように移動を開始した。その蟲の群れが目指す先は、果たして何処なのか。

不気味な影と想いの行方

著者：夏樹　真

ミーンミーン……
　夏の始まりを告げる、蝉の鳴き声が聞こえ始めた頃。
　幻想郷の木々は青々と生い茂り、その生を謳歌しているように見えた。それは、この博麗神社の周辺に生えている植物達も例外ではなかった。涼しいそよ風が流れると、ほのかに緑の匂いがする。
　そんな博例神社の裏側。夏だというのに黒い服を着込んだ少女、霧雨魔理沙は縁側にだらしなく足を放り出し、その暑さにダウンしていた。額にはそのブロンドの髪が、汗により引っ付いてしまっている。その格好は、どことなく魔女を連想させる。
「暑いぜ……暑くてこのままじゃ脱水症状になって干からびて死んでしまうんだぜ……」
　弱ったようなその声。そんな声に対して、無慈悲な返答が帰ってくる。
「あっついお茶なら入れてあげないこともないわよ。魔理沙が耐えれるんならだけどね」
　今の魔理沙にとって拷問としか取れない言葉を告げながら、博霊霊夢が奥からやってきた。腋を露出するという斬新な巫女服は、この季節には涼しそうだった。そんな霊夢の格好を見て、魔理沙はため息をつく。
「くそ、霊夢のその格好は涼しそうで羨ましいぜ。私も夏用に腋出しの服をアリスに作ってもらおうかな」
「止めときなさい。アリスに頼んだら、腋どころかお腹も出るわよ」

「尚更涼しそうでいいじゃないか」
　ケラケラ笑いながら、魔理沙は体を起こす。霊夢に視線を移すと、魔理沙の横に湯飲みを置いているところだった。まさか、と思ったが湯気が出ていないのを確認して安堵する。
　湯飲みに入っていたお茶を一気に飲み干す。キーンとする冷たさが喉をとおり、体の中へ入っていくのが分かった。
「くー、生き返るぜ。やっぱ冷たいお茶は最高だよな」
「はいはい、それ飲んだらさっさと帰りなさいよね」
「連れないなぁ、友達はもう少し大事にするもんだぜ？」
　霊夢にちょっかいを出して、軽くあしらわれる。そんな、何時も通りの毎日。
　今日もそんな一日だったのだが、そこで魔理沙はちょっとした違和感を感じた。
　ミーンミーンミーン……
　ジーワジーワジーワ……
　カナカナカナカナカナ……
　やけに、蝉の鳴き声が多く感じられる。
　そういえば、神社に来る途中にも蝶の大群や、蚊を多く見たような気がする。今年は、蟲の数が多いのだろうか。
「なぁ霊夢、今年ってなんか蟲が多く感じないか？」
「そうかしら、私はそんなに興味が無いから分からないけど」
「ほら、今だって蝉の鳴き声が色々と聞こえるだろ。普通はこんなことは無いはずだぜ」
「うーん、まぁ言われてみればそうかもしれないけど。偶然じゃない？」
　霊夢は興味が無いとばかりに、適当な返事で返してくる。そして空になった魔理沙の湯飲みを片付けに行ってしまった。
　その後姿を見送りつつ、魔理沙はいつぞやの出来事を思い出していた。
「仲間が多いほうがいい、か。あいつにとっては、楽しい夏になるのかもしれないな」
　いつか春に遭遇したときに、そんなことを言っていた少女を思い出していた。
　きっと今頃は、仲間達に囲まれて楽しくやっているのだろう。
　そんな姿を想像して、魔理沙の顔に自然と笑みがこぼれた。

　魔理沙がそんなことを思っていた頃。
　仲間が多いほうがいいと言っていた本人は、大変なことになっていた。

　密林とも言えるような、木々が密度を濃く茂る森の中。光が当たることを嫌うかのような森の中に、妖精と妖怪の少女達はいた。周りを良く分からないモノに囲まれて。
　チルノとリグルの周囲を囲む、黒い影。
　ギチギチと不気味な音を立てて二人を囲む影は、周囲数メートルを覆っている。その影全てから、明確な敵意が放たれていた。これまで感じたことの無いその敵意に、二人はただ押されるばかりだった。
「な、なんなのよこいつら……」
「これは……でも、そんな……」
　辛うじてチルノの口から出た言葉。こんな意味も分からない黒い影に突然囲まれて、更に圧倒的な敵意を向けられては、いつも強気なチルノでさえ押されてしまうのだろう。
　それでも、チルノは歯を食いしばり、リグルの一歩前に出る。
「なんなのよ、あんた達は！　突然あたい達を囲んで、やるってんなら受けて立つわよ！」
　叫ぶと、両手に冷気を集め始めた。氷の妖精であるチルノは、その能力によりある程度の冷気を操ることが出来る。それを弾幕に変え、戦うのが彼女のスタイルだ。
　だがそんなチルノの手を、リグルが止めた。
「待って、チルノ！　あれを攻撃しちゃダメだ！」
「なんでよ、襲ってこようとするんなら戦うのが普通でしょ！」
「違うんだ……あれは、あの黒い影は、蟲達なんだ！」
「えぇ!?」

その言葉に、チルノは黒い影を見つめる。周囲が薄暗くて分かり難かったのだが、蠢く黒い影は、確かによくよく見てみると小さな何か、つまり蟲達が集まって出来ているのが見えた。これだけの影を作るほどの蟲達である。果たして、その数は何千か、もしくは数万か。もしかしたら、それ以上なのかもしれない。

　その事実に、チルノの背中に寒気が走る。決して蟲が苦手なわけではないのだが、これだけの数である。生理的に、受け付けないのは仕方の無いことだろう。

　うっ、と何かがこみ上げてくるのをぐっと堪える。下手に気弱なところを見せると、襲われるかもしれない。その思いが、チルノの正気をなんとか留めていた。

「なんでなの、みんながどうして私達を襲うの!?」

　後ろから聞こえたリグルの叫び声。その声は震えていて、きっと涙を堪えているのだろうというのが容易に想像できるような悲痛な声だった。

　だが、その声を嘲笑うかのように。影はギギギと蠢くだけで何の反応も無い。二人に向けられている敵意も消えることは無かった。

　なんなのよ、こいつらは、とチルノは心の中でつぶやいた。蟲達は確かリグルを頂点として、生活していると聞いたことがある。それだったら、なんでリグルを襲うことがあるのか。何か不満でもあるのだろうか。

チルノがいくら考えたところで、この影達の考えなど分かるはずが無かった。

　ただ分かっているのは、リグルがいくら叫んだところで、こいつらに言葉は届かないということだけだった。

「止めるんだ、こんなことは……」

「無理だよリグル、こいつらなんかまともじゃないよ……戦わないとやられる!」

　再びチルノは両手に冷気を集めた。それに呼応するように、不気味な影達は殺気を強めていく。

　リグルが後ろで何かを言っていたが、チルノはそれを聞かないようにしていた。ここでリグルの言うとおりにしていても、どうしようもないと思ったのだ。

　このままではいずれ、衝突するのは間違いない。ならば、先手を打つべきだと。

　両者の緊張が極限まで高まったとき。

　予想だにしなかった、第三者が乱入してきた。

「あらあら、せっかちなのは良くないわね。もうちょっと穏やかにいきましょう?」

　突然響いた声。

　その声と共に、周囲に異変が起きる。黒い影たちの上空に、とつぜん空間が裂けたような「スキマ」が出現した。それも一つではない。見渡す限り、無数に現れたのだ。そのスキマの中には、大小様々な無数の目が見えた。まるで見下すかのように、黒い影を見つめている。

チルノには、それは黒い影よりも不気味に思えた。理解不能な現実とはまさにこの事だろうか。思考が止まりそうになるのを、必死に堪える。

　突然の事態に、二人と影は動揺を隠せなかった。

　それから間も無く。二人の前に、ある妖怪が出現した。その名は……

「あ、あんたは……あれ、誰だっけ?」

「あらあら、氷の妖精さんとはあまり面識が無いから覚えて無くても仕方ないわね。記憶力も良くないでしょうし。蟲の女王はそんなことはないわよね?」

「なんか、遠まわしに馬鹿にされた気がする……」

「八雲……紫、さん」

「うふふ、目上の妖怪への敬意を払えて大いに結構ね」

　八雲紫。幻想郷における大妖怪にして、チルノは知らないのだが、以前リグルに『警告』を与えた女性であった。

　導師服をアレンジしたような服。ふんわりとしたスカート部分にはフリルがふんだんにつけられており、胸のサイズと相まってゆったりとした女性らしさを強調している。リグルが前回に遭遇したときとは、違う格好であった。

　突然の乱入者に、影達はざわめきだす。蟲も予想外の事態が起きると混乱するらしい。

　そして殺気の矛先を、二人から乱入者へと

移行させた。
　この異常な状況下で、更に影達の殺気を全身に受けながらもそれを感じていないかのような余裕のある表情。紫はまるで、この程度のことは何でもないと言わんばかりの平静さである。それが逆に、チルノにとっては異様であった。
「そろそろかしらね……」
　紫の呟きに呼応するように、更なる変化がおきた。
　上空からまたしても乱入者が現れたのだ。空中に無数に浮かんでいるスキマの間を縫うように現れたそれは、紫の左右に対称になるように降り立った。
「遅くなりました。そこの二名と同じように襲われていたミスティア、ルーミア両名を無事保護。今は安全なところに避難させてあります」
「なんでみんなを狙うのか良く分からないけど、チルノとリグルも私達が守るよ！」
　紫の左側に立つのは、大きな尻尾が特徴の妖獣。八雲紫の式、八雲藍。
　右側に立つのは、チルノとリグルも良く知る人物だった。凶兆の黒猫、式の式、橙。
　唖然とするチルノに、橙は視線を向けると軽くウィンクをする。それはきっと守ってあげるという意思表示なのだろうが、どこか緊張感が足りない気がする。これだけ異常なものを前にしても、この余裕。
　まるでこのメンバーにとっては、こんな影達など気にするほどの存在でもないと言わんばかりに。
「さて、予想外の氷の妖精を除けば、予想通りの役者が揃っているわね」
　紫はチルノの腋をすり抜け、リグルの元へと歩み寄り、そっと顔を寄せる。
「これからの話の後、みんなに想いを述べなさい。そうすれば、この騒動は収まるわ」
「え……？」
「安心なさい。貴方の配下たちには手を出さずに終わらせてあげる」
　リグルの返答を待たずに、紫は振り返る。そして、静かな声で語り始めた。
「聴きなさい、下世話な蟲どもよ。貴方達が何にそそのかされたのかは知らないですわ。確かに今年の蟲は例年に比べ数も多く、力も強いでしょう。しかし、群れて強くなった気でいるのならば、それは大きな勘違いというものよ」
　薄い笑みを浮かべながら、淡々と言葉を発する。
　だがその笑みに含まれているものは、冷たい感情だった。まるで周囲の全てを見下すかのような、冷酷な笑み。チルノには、助けに来たはずの紫が本当に味方なのか疑いたくなる。そんな感想を持たせるような、笑みだった。
「貴方達をここまで守ってきてくれたのは一体誰かしらね。頼みもしないのに孤軍奮闘しながら、蟲の地位向上を狙って頑張っていたのは何処の誰かしら。貴方達が殺意を持って、対峙していた相手は氷の妖精と誰だったのかしらね。ここにいる愚かな貴方達はそんな簡単なことすら忘れてしまっているのかしら？」
「紫さん……」
　紫の笑みはそのままに。少しだけ語尾が強くなっていた。
　そこに含まれた感情は、何なのか。チルノにはそれがはっきりとは分からなかった。
　だが、なんとなく怒っているのかな、と思った。
「確かに貴方達の王女様は頼りない一面もあるでしょう。失敗も決して少なくは無い。むしろ失敗が続いていると言ってもいいわ。貴方達が不安に思う気持ちも理解できなくは無い」
　チルノがふっと気づくと、回りの影達にざわめきのような、不思議な音がしているのに気づいた。
　それは、まるで動揺しているかのようにも感じられる。殺気も、段々と薄れている気がした。
「でも、貴方達の王女様は頑張っているわ。見返りを求めるわけでもなく、みんなが安心できるようにと。その行為は、愚か過ぎるほどに美しい行為。故に、八雲紫はここに宣言しましょう。蟲の王女、リグル・ナイトバグを盟友と認め、その行為を支持すると」
　紫のその発言は、全ての蟲達を黙らせるの

に時間はかからなかった。

　もはやそこに敵意はなく、不気味なほどに静かになってしまった。それほどまでに、今の話は効果があったのだろう。チルノとしては紫のその意図などはまったくわからなかったが、とりあえず沈静化したことに安堵の息を漏らした。

「さぁ、我が盟友、リグル・ナイトバグよ。何か言いたいことがあるのではなくて?」

「え、あの……その、えーと」

　紫に話しかけられ、リグルは緊張したように紫の前へと出る。

　彼女の眼前に居るのは、何故か突如牙を剥いたものの、今は大人しくしている蟲達。彼ら全ての意図や目的などを知るのは不可能だが、そんな蟲達に対してリグルはなんと言うのか。

「私はみんなの中では力があるし、妖怪だから頂点みたいな感じになってるけど……でも、今でもたまに不安になることがあるんだ。本当に私なんかでいいのかって。迷ってたんだよね、きっと。だからみんなも不安になって、こんなことをしちゃったんだと思う。でも、そんなことはもうどうでもいいんだよ」

　リグルはその想いを伝えるかのように、言葉を発する。

　今あったことを、気にしないというリグルの想いは、チルノには少し理解できない所があった。自分ならば、こんな怖い思いをさせられた訳だし、間違いなく弾幕で攻撃をしていたと思う。

　でも、リグルはそんな道は選ばなかった。そこが、リグルの優しいところなんだろうと思う。迷ったりもするけれど、それでも仲間を思う気持ちだけは、揺るいではいないのだろう。

「これからは、なるべく迷わないようにするよ。みんなの女王として、改めてみんなを守って生きたいと思うんだ。紫さん達も私を支持してくれている。これほど心強いものは無いよ。だからみんなも、もう心配しなくていいんだよ」

　きっと、蟲達は不安だったのだろう。

　その不安な気持ちと、力が強くなってしまったことと、蟲の数が多くなったという不幸が重なり合って起きてしまった事件だったのだ、これは。

　そう考えると、チルノの中にあった恐怖や怒りは自然と薄れていった。

「だから、みんなはもうお帰り。自分達の、あるべき場所へ」

　そのリグルの声が合図となり、影たちは一斉に移動を開始した。

　どれくらい居るのか分からないような蟲の群れが、次第に数を減らしていき、やがて全ての蟲達がその場から居なくなった。多少荒れてしまってはいるものの、森は本来の静かな自然を取り戻していた。

「これで一件落着かしらね。藍、橙、戻るわよ」

　紫の声に、名前を呼ばれた二人は頷きその後ろへと続く。

「あの、紫さん!」

「何かしら?」

　リグルの呼び止めに、紫は振り向かずに声だけで反応する。

「ありがとうございました。これで、少しは迷いが減ったかもしれません」

「迷うことは決して悪ではないわ。でも、貴方は悩みずる傾向があるわね。そこの氷の妖精や、ハクタクをもう少し頼ってあげなさい。みんな、仲間なんですからね」

　その言葉だけ残し、紫とその式達はスキマと呼ばれる空間の中へ入っていっていなくなってしまった。

　まるで、台風のような激しい時間だったなぁ、とチルノは思う。安心したせいか、どっと疲れが出てきてしまい、その場に座り込んだ。

「なんというか、凄い疲れた……」

「あはは、なんだかゴメンね、巻き込んだような感じになっちゃって」

　座り込んだチルノの横にやってきたリグルは、そのまま腰を下ろして横に並ぶ形に座った。

「でも、これでやっぱりまだまだ信頼をされ切れてないんだなぁってのが実感できたよ。もっと頑張らないとね」

「頑張るのもいいけど、あんた一人で頑張るのは限界があるんだからさ。少しはあたい達

を頼ってみるといいと思うよ。みんな、リグルの仲間なんだからね！」
　チルノの言葉に、リグルは驚いたような顔を向ける。
　そんな顔を向けられたものだから、チルノは対抗するように笑顔を向けることにした。つられるようにリグルも笑顔がこぼれ始め。
「……うん！」
　最高の、笑顔となった。

　マヨイガへ帰ってきた八雲一家の面々は、その後思い思いの午後を過ごしていた。
　橙はルーミアとミスティアが心配だというので出かけていった。紫は部屋でゴロゴロでもしているだろう。
　藍はいつもの様に、家事に取り掛かっていた。今日は少し時間が押しているため、急ぎ足でこなす必要がありそうだった。
　掃除を終わらせ、洗濯に取り掛かろうとしたとき、紫が部屋から出てくるのを見かけた。
「おや、紫様。何か御用ですか？」
「用というほどの事ではないのだけどね。藍は今回の件をどう思うかしらとね」
「はぁ……今回の件、ですか」
　今回の件というのは、あの蟲の王女と蟲達の反乱のことだろう。
　それをどう思うのか、という紫に、藍は率直に思うことを答えた。
「そうですね、今回の件は蟲の王女であるリグル・ナイトバグが自分に自信を持てず、その結果として蟲が不安から反乱を起こしたという感じでしょう。普通ではありえないことですが、今年は蟲の数が多く、その力もいつもより強いために起こった事件です。まぁそれも、紫様の介入で無事に終わったのではないでしょうか」
「……そう。まぁやはりそう考えるわよね」
　藍の言葉を聞いて、紫はうーん、と悩むような顔をする。
　何か気になることでもあるのだろうか。これで無事に解決したと思っていた藍としては、どこが引っかかるのかがよく分からない。なので、紫の言葉を待つことにする。
「確かに、蟲は数も多いし力も強くなっていた。でも、それだけで反乱を起こすかしら」
「大衆というものは、自分の上に立つ者に不安があれば憤りを感じて、それを反乱という形で実行することがある。今回もそういうものなのではないでしょうか？」
「もしそうだったとしても、何か起点となる出来事が必要となるわ。誰かが煽る、とかね」
「……黒幕が居るとでも？」
「可能性の話よ」
　もしも、今回の事件に黒幕が居たとしたら。
　一体何の目的で。こんな事件を起こしたのか。そこに何の利点があるのか。疑問が次々と出てくる事になる。もしかしたら、まだ事件は終わってないのかもしれない、とも考えられた。
「でも、今回は紫様が介入されたのです。仮に黒幕が居たとしても、紫様を敵に回すようなことはしないでしょう。それは無謀すぎます」
　藍には信じがたい話ではあったが、それでもたいした問題ではないと考えた。
　もしもリグルを倒し、それに変わって蟲を統括しようとしていたものが居たとしても。八雲が介入したということは、リグルノバックに紫がついたというのと同意義なのだ。八雲を敵に回してまで蟲の頂点に立ちたいのならばまた変わってくるが、そこには大きなリスクが生じることとなる。
　それ故に、藍にはこれ以上の事態が起きるとは思えなかった。
「……そうね、きっと私の考えすぎね。いつから心配性になったのかしら」
「あはは、まぁこれで今回のことは終わったと思うべきでしょう。それでは、私は洗濯に行ってきますね」
　紫に告げ、洗濯物を持って移動する。
「……幻視蝶。絶滅したと思っているのだけど、もしかしたら」
　紫の最後の呟きが、藍の耳に入ることは無かった。

（終）

〈作者コメント〉

どうもー、夏樹です。今回もギリギリ製作になってしまいまして、自分の計画性の無さに絶望した！　予定では次回かその次位で終わらせるつもりです。ダラダラ続いてしまっていますが、どうぞ暇つぶし程度にお付き合いくださいませー。この名前でPixivもやってますよ！（宣伝乙

7月号テーマ
グルメ特集
『バーガータワーはロマンです』　緑
読者の胃袋に訴えかける、とのことでしたので、今や日本人にとっても身近な食べ物となったハンバーガーを。　飽食の時代である今、ハンバーガーは「おやつ」になりつつあるようで……。小食な私にとっては十分な「ごはん」。おやつ感覚で食べれる人がぱるし……羨ましい……！
某ビシバシするゲームを思い出 した方は私と握手！

『虫の主食は花の蜜だと思った』　貴キ

蛍はカワニナという貝が好物らしいですね…。

『 リグルメマツリ 』　くらげん

グルメと言ったらこれ。美味しい上に楽しめて、お腹も心も満足！ただ財布には優しくないですね；

『 リグメロンクリームソーダ 』　ara

緑色繋がりということで。綺麗な緑色でドリンク兼デザートなメロンクリームソーダが好きです。
…こぼしてますけど。

『 無題 』 モ誠幹

こうやって描かせてもらうのははじめてです。
“うまそうな”といえば、俺はパッとお菓子が思いついた。
色塗りは初めてに近いけど少しがんばったつもり・・・ちなみに大ちゃんが埋まってんのはゼリーですよ

『 なんとかオリジナル 』　怒羅悪

もうちょっと上手くすれば広告チックになったかも・・・w
伏字にはお好きな数字を入れてください。
すいません、文章打ちたかっただけです。大変失礼しました。

夢オチは人類最高の手抜きオチだ！

著者：社　蛍夜

※注意※

このｓｓは色んな物に関係ありません。特に『蟲の願事』とかいうｓｓにはかなり関係ありませんよ。

特にリグルのイメージは人それぞれだと自分は思ってますので、イメージが崩れても諦めてください。

ついでに言うとｓｓなので想像力の無い人にはオススメしません。以上の事おｋな人はどうぞ進んでください。

青い空、白い砂浜、塩の匂い、そして

ザザーン

この音。そう、ここは海。

そして、そこに立っているのはリグル。

「・・・」

リグルは立ち呆けている。さて、なんでだろうね？

それでｈ「ねぇ」

・・・そｒ「無視するなよ」

天の声（作者）に話しかけるなよ。

「いや、天の声って・・・」

まぁいいか、この方が進み速そうだし。

「私熱出して寝てなかったっけ？」

本編に口出し無用。さて何から話そうか？

「んじゃ、締切前日に何こんなのかいｔ

それ以上は禁則事項です。

「・・・んじゃ改めて、今回は何をするのかな？」

お、聞き分けがいいですね。

「どこまでも海と砂浜のここでどうしろと」

そうですね。では今回リグルにしてもらうことはこちら！

「お、バーベキューセットが出てきた」

そうです。ＢＢＱですよ。もう夏なので、海でＢＢＱをしてもらいますよ。

「・・・するだけ？」

いえ。グルメ特集なので、食べながらリポートしてもらいますかね。

「なるほど、で食材は？」

ＢＢＱセットを見てごらんなさい。

「あっ、焼けてる。っていくらなんでも無理ありすぎじゃ」

天の声と話せる時点でご都合主義すぎるんだから、気にしたら負けだよ。はいお皿。

「あ、簡易テーブルとお皿が出てきた」

さぁ、それでは食べてもらいましょう！

「はいはい、それでは野菜からいただきます」

『幻想郷　妖怪の山農業協同組合（月刊ＮＩＧＨＴＢＵＧ　創刊号）』様及び『幻想郷九天の以下略（月刊略　６月号参照）』様提供です

「最後の方略しすぎな気がするよ、ではあらためて・・・もぐもぐ、ッこれは!?」

なんという定番、どうしましたか？

「野菜の甘みと苦味が絶妙なバランスで混ざり合ったハーモニー、さらに炭火で焼いた事によるものかいつも食べる物より一段上の美味しさを感じる！」
うわ、書いてて自重してしまった。さて、次はお肉ですかね。焼き鳥屋なのに鶏肉を使わないミスティア様の屋台より、牛モモ肉と豚ヒレ肉をいただきました。感謝。
「みすちーが？　いただいたってタダでもらったの？」
リグルに食べさせる言ったらこれ持ってけってね
「・・・みすちー」
ドラマ展開しない。作者は決してミスリグが好きというわけではない。恐らくね。ではお食べください。
「ん・・・もぐもぐ、ッこれは⁉」
さぁ二度目です。どうしましたか？
「このお肉、きれいな赤身なのに脂が乗ったようなジューシーな感じがする！さらに豚肉はヒレ肉だからカロリー控え目だし、牛肉は旨みが凝縮されて・・・出てくる肉汁もとても美味しい！」
書いてて腹減ったな・・・もうおやつ時か
「そんな時間に書いてたのね・・・」
日曜だしいいじゃないか。さて、目的も果たしたしそろそろ終わるかね。
「えっ！ちょっと、私を返してよ！」
あぁそれなら全部食べれば帰れるよ。
「へ？　何で？」
だって夢だもの（笑

※※※

「ッハ⁉」
リグルは寝ていたようだ。気づいた時は自宅の布団の中にいた。
「変な夢を見たような・・・気のせいか」
そのまままいつも通りの生活に戻りましたとさ。

（終）

〈作者コメント〉
注意書きにもありますが、これは実在する妖怪や食材やｓｓには一切関係ありません。
どこかのｓｓが一瞬浮かんだ人。
デジャヴです。忘れましょう。

この作品には蟲描写や写真が含まれています。
蟲の手帖
描いた人 HOUSE
7月号
2009 JULY
■前回のあらすじ
蟲の可愛さを世間に広めるための冊子を発行したリグルだったが――……
八目うなぎ
――…ダメだ このままじゃ

読めない!!
字が!!
大ちゃん読んで

ごめん…
…読めない…

丁度いい!!
バタ
バタ
ゴキブリ叩きが必要なんだ!!

…こんなんばっかし
ぐで～

まだ一回目なんでしょ？
気長にやりなよー
継続はなんとかって言うし
「力なり」？
八目鍋でも食べて
なんとかを養うといいよ
ほら

ありがと…
ー…って

あーー!?
土鍋の下に敷いてる
のは私の冊子ーーッ
しかも
重ね敷き。

いいじゃないのー
配るあてがあるでも
ないんだしー
重宝
してます
サクッ
はぅ

それにしても安直ねぇ
……何が
弱肉強食
ヒック

行動パターン
グルメ特集で私の屋台って
絶対にかぶるわよー
まぁ
光栄だけどね
あ゛ー
メタ発言だ
いいのかそれー
配るあても
ない。

駆け足で解説する「昆虫食」
昆虫の栄養価は高く、グラム当たりに換算すると牛や鶏にも引けをとらない優秀な栄養源です。
また繁殖力が高い上に成長も早く、しかも他の家畜と違い人間が食べられない資源も活用でき、しかも省スペースで飼育が可能です。
(例えば牛肉を1kg得るためには牛に7kg以上のエサを与える必要があります。)
私はてっきり昆虫食の話題を持ってくるんだとばっかり思っていたわ
それだって十分かぶると思うけど…

…あとはリグルが食べられちゃうオチとか？
ひえッ!? 待ってよ!! 蛍には毒があるの知らない!? すっごくマズいんだから！

でもツチハンミョウやドルーリーオオアゲハみたいな強い毒じゃないでしょ？
近いよみすちー
そ…そりゃまぁそうだけど～
…ん？

…なんでミスティアがドルーリーなんて知ってるの
土斑猫はともかく…
ドルーリー オオアゲハ
開張 オスで約24cm
メスはずっと小型
アフリカ最大の蝶。
体内にネコ5~6匹を殺せるほどの毒を持つ。
ツチハンミョウ 体長9~23mm
猛毒カンタリジンを体内に持つ。
体液に触れただけで水ぶくれになるのでうかつにつついたりしないこと。

なんでって
リグルが本で読んだんでしょう?

ガタッ
ねぇミスティア これって…
大体ね

美味い不味いって言っても蟲の味は蟲の味っていうか要は味付次第じゃない?
後ろだと!?

リグルってば最近なんだか美味そうよ
むに。
いて

ちょ…私の話聞いてた!?

これ全年齢向けなんだってばぁ…

ー…おはようございます!!
お。
バッ
はい おはようさん
…夢は願望の表れと言いますが一体どんな夢だったんです？
店主の名前を連呼しておりましたが
最近少し丸くなったか？
不安や悩みの表れとも言うがな
う。
何？ 文さん 私の話ー？
こっちで揚げものしてると聞こえなくって
ええ 実は…
何でもないの!!
えー？でも確かに…
いいからッ ほら手伝うから早く終わらせようよ!!
えーリグルが手伝うと逆に手間かかるしー
ひでえ!?
いやぁ青春だな
…ところで魔理沙さん鍋敷はノーカウントじゃ…
有りだぜ

［りりかる☆りぐるのすわっと一品］　言示弄

まずは材料の準備
ミスティアの生みたて卵：一個
(普通の鶏卵でも問題なし)
キャベツ等野菜の千切り：適量
コールスローミックスとか便利
※ただし消費期限が短いので注意

※すわっと一品：「ヴ●ンプ将軍のさっと一品」というものがあってだな・・・

①では作ってみよう
器に野菜を盛る

この時真ん中に軽くくぼみをつくろう
まぁなくてもいいけど

※器はレンジに入れても問題ない物を使おう。物によっては割れたり溶けたり変形したりする。怖い。勿体ない。怒られる。

②卵を野菜の上に乗せる

殻が入ったとか
カラザ嫌とか言うなら
取り除きましょう
黄身が二つだったら喜ぼう

③ラップをしてレンジへ

しなくてもいいけど
爆発することもあるので
最初はした方がいいかな
慣れても爆発するときはするけど

ヴヴヴヴヴ…

あとはレンジで
五十秒～一分半くらい

時間はレンジの
ワット数と
黄身のお好みで
調節しよう

半熟気味がいいなら
一度数十秒やってから
状態を確認して
さらに数十秒
多分それでいける
ね

④完成
※今回はコールスローミックスを三分の一
五百ワットレンジで四十秒×二回で
つくりました(ラップなし)

ね？　簡単でしょ？

・小腹が減った
・おかずをもう一品足したい
・一人暮らしだし
調理とか面倒くさい
・野菜食わないと死ぬ
でもサプリとかはちょっと・・・
なんて人達にオススメ
醤油・ドレッシング等の
お供はご自由に

「卵が余ったぞどうしてくれる」
なんて人はゆで卵にするといい
そこそこ長持ちするし

ゆで卵はそのまま食べても
サラダに使ってもいいし
潰してマヨネーズと混ぜて
パンにはさんで食べても
おいしいよー

材料費六十円未満だし、結構悪くないと思うんだ。

※調理をする際は自己責任でお願いします。　卵や電子レンジが爆発しても責任は負いかねます。　ご了承ください。

えーりん!!
おなかすいた!!
お肉がいい～!!

はい!姫様!!

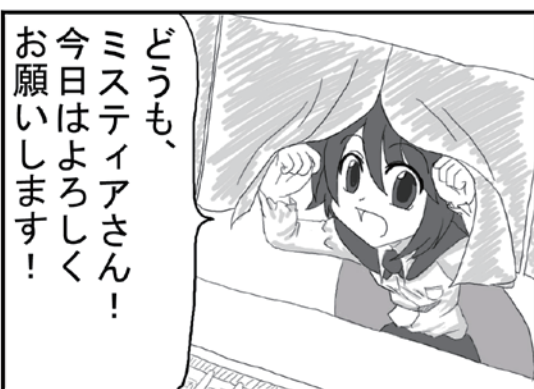
お肉…そんなお金…
はっ!そういえば…

うーまーいーぞーー!!

ごめんなさい。

描いたアホ：草加あおい

あと少し早かったらどうなっていたろう

飛んで鍋に入る。

描いた生きモノ：毒粗
make a cook
♪～
King Crimson!
Finish!!
……。
good job.

あーもぅ蒸し暑いなぁ～
あ、あそこにいい感じの小川があるよ
さなえ～さなえ～
お…おしっこ…
た、大変！どこか水場を探さないと…
リグると！
おいしいみず
ここならおいしー氷ができそう！
ふふふ、蛍は水質にはちょ～っとうるさいよ～
ミネラルの量を表す蒸発残留物ってのがあって、量が多いとシブくなっちゃうんだけどここにはちょうどいい、まろやかな濃さだね。
CaやMgを表す硬度は高いと苦くなるんだけど、薄いと逆に味気ないみたい。ここは結構好みが分かれるね。
残留塩素はほとんどないね。うん、きれいな水だなぁ。
あと炭酸の濃度、これが少し含まれてるからさわやかな感じがするよ。
あとは臭気指数だけど…
あはは、リグるん何言ってるの？
こっちの水はあ～まいぞって
おし…
ざくっ
はっ

描いたひと：ひどぅん

ボクorわたしを
召し上がれ(照)
描いた生物　戌亥
ってこんなネタが
来ているハズッ！
思っきり他の人の
ネタを潰したッ!?
グルメ
ネタ
なら！
コレハ
ヒドイッ

『 グルメ（性的な意味で） 』　凡用人型兵器

先月のイラストについて、エロくないとかもっとやれとかもっとズボンずりさげろとか言われたので。あと、エロリグル祭に乗り遅れたので。この後なんとか逃げ出すことができたか、おいしくいただかれてしまったかはご想像にお任せします。あと、描きながら「俺ってこんな芸風だったっけ？」と首を傾げていましたが、よく考えたらこんな芸風でした。割と前から。

ほたるこい　第３話

著者：はね～～

「懐かしいなぁ。こうやって昔の事を思い出す事なんて、ほとんどないもんな」

　ミスティアから出された水をちびちび飲みながら、私は小さく息を吐いた。

　私は多分普段と比べて、よっっっぽど似合わない顔をしてるんだろう。ミスティアが少し驚いたように私を見てた。

「ん？　どしたのミスティア」

「いやー。リグルも、そうやっていたら少しは大人っぽく見えるかなとか思わなかったり、やっぱり思わなかったり」

　それって結局思ってないって事じゃん。

　こういう時は嘘でも大人っぽく見えるとか言えば良いのに。

　……無理かも。

「でもリグル。何だってそんなに寂しそうなの？　楽しかった思い出なんでしょ」

「……うん」

　ミスティアの言葉に私はただ、小さく頷いた。

　このまま楽しかった思い出で話が終われるなら、どれだけ良かっただろう。

「えーと、次の日ひかりに会いに行ったとこまでは話したよね？」

「待ち合わせに寝坊してひぇええええ、でしょ」

　気を取り直して私が話を戻すと、速攻でミスティアから茶化される。

　どうしてそういう嫌な所だけしっかり覚えてるかな！　でも突っ込む気力はあんまり無いし、私はミスティアのボケをさっさと流す。

「それからひかりとは確か1ヶ月近くの間、2日に1回は会ってたんじゃないかな。もうその辺りの記憶は大分ぼんやりしちゃったけど……」

　場所が川だったから一緒に釣りをやってみたり、水かけやったり。

　後は私は飛ぶの禁止の条件でかくれんぼしたり、どれだけ河原の石を積み上げられるかとか、後はひかりを背中に乗せて空飛んで回ったりとか……色々やったよなぁ。

「へぇ。でもそれにしたってリグルの方が圧倒的に有利でしょ？　まぁ、その辺りは上手く負けてあげたり掴まってあげたりしたんだと思うけど」

　はぁあ。

　そこはお姉さんらしくやったんだよね、と笑うミスティアに私は頭を抱えた。

「いや……それが……」

「えー？　リグルもしかして、大人気なく本気出して勝ってたの？　流石にそれはどうかと思うよ」

　水を注ぎながらジト目でミスティアがこっちを見る。

「失礼だな！　そりゃ私だって最初の内は『子供相手に本気も無いよね』って手加減してたよ。だけど……」

「だけど？」

言葉の途中でお茶を濁そうとした私に、キリキリ吐けと言わんばかりにミスティアが追い討ちをかけてきた。
　あーもう、分かったよ言えば良いんでしょ言えばっ。
「手加減してたら全然話になんないから、途中からはずっと本気出したのにそれでも私の方が負ける事多かったのよ、悪いかー⁉」
　かくれんぼやら缶けりやらは、見かけからは全然分からなかったけど走ったり隠れたりするのやたらと速かったし。
　特に石積みは一人でいた時もやってたらしくて、ひかりは異常に強かった。ハンデを貰ってさえ一回も勝てなかったのは、とっても情けないけど今でも覚えてる。
「……あー、うん……ごめんリグル。酷いこと聞いたよ、私」
　物凄くすまなそうに謝るミスティア。
「いや、あのね……こんなどうでも良い所でしんみりしないでくんないかな。それに私は楽しかったし」
　たまにひかりが嬉しそうに笑うのを見るのが楽しみになったから。だから勝ち負けなんかどうでも良かった。
「それで……確かひかりと会って二十日くらい経った頃かな。ミスティアが歌ってた歌あるでしょ、あれをひかりから教えてもらったんだよね」
　ぼやけた所の多くなったひかりとの記憶だけど、その日の事は……とても良く覚えてる。
　そう、あれは水無月に月が替わってすぐだった。

******

　その日も昼から日が沈む位までの間ひかりと一緒に遊んでいた私は、疲れて大き目の石を椅子代わりにして腰掛けた。
　すると、ぺたぺたと足音立てながらひかりが側までやって来て石の上にちょこんと座る。そうしてると、まるでお人形さんみたいだった。
「リグル」
「ん？　どうしたの、ひかり」
　夕陽の照り返しでひかりの真っ白な髪の毛がオレンジ色に染まっているのを見て、素直に私は綺麗だと思った。
　そして影のある顔でひかりは、ぽつ、と呟く。
「わたしといっしょで……リグルは……楽しい？」
　出てきた言葉に私は目を丸くした。そんなの決まってる、一緒にいて楽しくない奴と半月以上顔をあわせてられるほど私は暇じゃないぞ。
　つい勢いのままそう言いそうになったけれど、ギリギリで私は思い留まる。
　ひかりは口数が凄く少ないから、何を言いたいのかすぐに伝わらない事が多いんだって事を私も分かってきたから。
「じゃあ私も聞きたいんだけど。私と一緒でひかりはあんまり楽しくない？」
　だから私は逆に聞き返した。もしこれで『うん』とか言われたら立ち直れないくらいべっこり凹むけどね……。
　でも勿論そんな事はなくて。小さくだけどひかりにしては珍しく、はっきり何度も何度も首を横に振る。その様子を見て私は、ひかりが何を言いたいのか分かった気がした。
「もちろん楽しいよ。そして今のひかりの答えで、もっと楽しくなったし。こういうのは自分一人だけ楽しくてもダメだもんね」
　自分は楽しいけど、付き合わせてるだけだったらどうしよう。多分そんな事をずっとひかりは思ってたんだろう。元々私がお節介全開でこうなってるんだから、気にする事なんか何も無いのになぁ。
「むしろこっちとしては『相手にとって不足』とか思われて無いかとか気にしてた位なんだけど大丈夫？」
　わざとおちゃらけた風に私はひかりに尋ねる。いや、今日のかくれんぼも見事に惨敗した私としては実は本当に気にしてんだけどさ。
「……うんっ」
　大きく頷いて笑った光の目尻には、うっすら涙が光っていた。

あー。なんだろう、こう……ちょっとどころじゃない位ぎゅっとしたくなった。でもやったらまずいよなぁ……色々な意味で。
　ええい話題変えよう話題。
「そうだひかり、そういえばまだ聞いてなかったけど。蛍が好きって主にどの辺りだろ。ほら、私も蛍だけど自分の事ってあまり見えないもんだし」
　何でも良いからと思った割には気の効いた話題が出てきてちょっとほっとする。
　でもひかりは不思議そうに首を傾げた後、まるで当たり前みたいに
「だって……きれいだよ?」
　そう『私』を見ながら言ったもんだからさあ大変。……うん、正直一瞬自分に対して言われたもんだと思って、顔が真っ赤になったよ。
　当然ひかりは分かって無いのか、目を何回かぱちぱちさせていた。……そんな顔してもダメ、教えない教えないこれは教えらんない。
「リグル、あとどのくらいかな?」
　だけど私のアレな同様は結局ひかりには知られなかったらしく、地面を見下ろした後に私に問いかけた。
　ひかりが私に『あとどのくらい』と聞く内容なんて当然一つっきゃない。
　土に手を当てて蟲達にちょっと聞いてみる。
「そうだなー、どうやらあと二十日はかからない位っぽい。今年は少し早いほうかな」
　まあ予定は未定って言葉はあるし、ちょっと位遅れる事も良くあるんだけどね。
　本音を言うと今年だけは少し遅くても良いぐらいだ、蛍の時期が終わったら多分ひかりも川辺に毎日は来なくなるだろうから。
　いつまでもこんな時間が続く訳じゃないのは私だって分かってるし。ただ、できればもうちょっとだけ長くても良いな……と思う訳で。
　なんて事をつい考えてると、ひかりが私の服の裾を軽く引っ張った。
「ねえ。リグルは、ほたるのお歌ってしってる?」
「蛍の歌? あー何か聞いた気もするなぁ、蛍の光窓の雪とか……あの歌嫌いなんだよね」
　蛍からすればすっごく迷惑な歌なんだよね、あれ。本が読みたいんなら私達じゃなくて油を使ってくれって言いたいよ、心底。
　けれどひかりは、そっちじゃないよと言って小さく笑ってから一度大きく息を吸う。
「ほー　ほー　ほーたるこい　あっちのみずは　にーがいぞー　こっちのみずは　あーまいぞー　ほー　ほー　ほーたるこい」
　初めて聞いたひかりの歌声は、凄く綺麗で小川の水みたいに澄んでいた。
　だからつい反応を返すのも忘れて黙って聞いていて。
「……しってる?」
　って私の顔を覗き込みながら聞かれるまで、私はぼーっとしていた。
「あ。えーと、ごめん知らないや。……でもその歌を作った人間は良い勘してるかも。水にも味があるんだよ」
　ほんのちょっとだけど、と付け加える。まあ幻想郷の水は元から甘い水が凄く多いし最近は甘い水が少しづつ増えてるけど。
「さとう?」
　多分ひかりにはピンと来なかったんだろう。甘いもの=砂糖って発想に私は吹き出した。
「むー」
　ぷぅ、とひかりは頬を膨らませる。そんな拗ねるような表情は、私でさえ今日始めて見たから驚いた。こんな顔も出来るんだ、って。
「そうじゃなくてさ。私はともかく蛍は成虫で出てきたら水しか飲めないから、ちょっとした水の味にも本当に敏感なんだよ。ただそれだけの話なんだけど」
　けれどひかりの頬はさらに膨らむ。ありゃ、本当に拗ねちゃったかな……どうしよ。
　と思ったら、ひかりはふっと表情を緩めて笑った。
「いっしょに歌お、リグル」
　あ。このー、ひかり拗ねたフリしてたな!
「よーし。じゃあ蛍が出てくるくらい一杯歌おうか?」

「うんっ」
　結局それから2番まであるっていう簡単な歌詞をひかりと一緒に何度も繰り返し歌った。物覚えの悪さには自信のある私でも、覚えられる位には。
　だけどひかりと一緒に蛍を呼ぶのは、何だか凄く楽しかった。何だかこのままこうやってたら、土の中のみんなが本当に出てくるんじゃないかって思ったぐらいだ。
　いやまあ、こんな早く出てきても寿命削るだけだから勿論出てこなかったけどね？

　ひとしきり歌った頃には、太陽はもうすっかり沈んで空も暗くなってきていた。
「ありゃ……もう暗くなっちゃったね。じゃあ今日はこれでおしまい、次はまた明後日に会おうか」
　毎日にしてないのは、流石に妖怪と毎日河原で会うのは宜しく無いだろうって考えてだ。
　けど、それが色々と問題なのはひかりも同じらしい。
　ひかりは表情を曇らせて首を横に振る。
「……おばさんの手伝いで、しばらく……こられないの」
　ひかりの言葉に正直私は少しむっとした。もちろんひかりに対してじゃない。
　夜中に平然と、わざと妖怪に襲われるように一人で好き勝手させてたくせに、人手が必要な時にひかりを今更呼ぶ神経が腹たったんだ。
「なのかだけ、だから」
　ただその気持ちがつい顔に出ちゃったのか、ひかりは慌てて付け加えた。余計な心配をひかりにさせた自分に、ちょっと自己嫌悪だよ……はぁ。
　でも一週間なら大丈夫だな、できれば蛍のみんなが出てくる時はひかりと一緒にみたい。
「そっか。じゃあ七日後、待ってるよ。遅れてきたら怒るぞー？」
　ひかりの不安を吹き飛ばすように私はわざとおどけてみせる。
　ひかりが？　遅れてくる？　ないない、絶対ないそんな事。寧ろこんな事いっときながら私が遅れたら笑い話にもなんない。
「だいじょうぶ。……またね」
「うん。じゃあまた」
　入口の手前で振り返って私に向けて手を振った後、ひかりは中に入って行った。

******

　その年は、いつもよりも少しだけ暑かったのを良く覚えている。
　それが理由なのかは知らないけど時折耳に入る妖怪たちの噂で、今年は鼠を一杯見かけるって話が聞こえてきた。
　とは言っても私達妖怪の間じゃ鼠が増えたからって困る事はあんまりない。精々で猫又が大喜びする程度の些細な事だろうと思ったし、実際大した事は何も無かった。
　でもそれは、あくまで妖怪の中だけの話。
　人間の里じゃ……それは些細なことで済まなかったんだ。

******

「あと10日くらいかな。蛍は人間を楽しませる為に飛んでる訳じゃ無いけど、でも今年はみんな頑張って欲しいよ。特別ギャラリーが待ってるからさ」
　そして一週間後、ついつい普段以上に気が急いた私はこの日も近くの小川を見て回っていた。
　土の湿気と幼虫のざわめく雰囲気から、もう少しで出てこれそうなのを確認したあと、私はひかりの待ってる川べりに向かう。
「約束した時間より今日は随分早いかな……。まあ良いや、どうせひかりの事だからもう来てるかもしれないし」
　実際は随分どころの騒ぎじゃない、一時間以上早い。
　でも、ひかりは多分確実に来てるんだろうな。初日の大遅刻は兎も角としても、ひかりが私より遅かった事は一度も無かったから。
　ひかりと出会ってからほんの一月も経ってないのに、何だかんだでこうやって会うのが楽しみになってる気がする今日この頃。中

途半端に時間が空いた事でよりそれを実感した。
「うーん……。これは本格的に情がうつったかなぁ」
　飛びながら私は頭をかく。
　妖怪としてこんなんで良いのかと思わなくもないけれど、出会った頃に比べて大分表情が豊かになってきたひかりの笑顔を見てると、こっちも嬉しくなるんだよな。
　それに人里に残してもひかりが幸せだとは思えない。いっそ私と一緒に暮らしてみないかとか、ちょっとだけ頭の片隅をよぎる事もあるぐらいだ。
　正直これは自分でも、かなーり末期症状だと思う。
　元々住む世界が違うんだし、あまりべったりだと後々お互い別れる時に辛くなるだけだって……分かってはいるんだけど。
「まあ難しい事は蛍の皆が出てきた後にでも、ゆっくり考えるか。あまり考えてると頭痛くなってくるし」
　結局途中で考える事を放棄して、私は川縁の真上までやって来た。
　久しぶりに見るひかりが今日はどんな風に寄って来るか想像しながら周囲を見渡す。
けど。
「あれ……まだ来てない？」
　待ち合わせ場所の目印にしている大きな石の前まで来たけど、ひかりがいない。
「おーいひかり～。いるなら返事してー」
　ふよふよと暢気に周囲を飛び回る私。だけど、そんなのどかな雰囲気は少し離れた反対側の岸辺で倒れてるひかりの姿を見て吹っ飛んだ。
「ひかり⁉」
　何も考えず私はひかりの側まで飛んで行った。まさか、ここまで来る間に他の妖怪に襲われたんじゃあ⁉
　だけど、私の予想は違った。
「………リグル」
「大丈夫なの、ひかり⁉」
　弱々しいけれどひかりから声が返ってきて、私は一瞬ほっとする。返事が出来るって事は無事だと思ったから。
　でもそれが大間違いだって事は、すぐに分かった。
　私がひかりを抱き上げると、まるで焼けるように体が熱を持ってるんだから。そして手足には、白い肌と対照的な黒い斑点がまだら模様みたいに一杯浮かび上がっている。服を捲って見ると、その斑点はお腹の辺りにもびっしりとあった。
　元からあった痣とは明らかに違う。どう贔屓目に見たって普通じゃない。
「こんな体調で出てくるなんて何を考えてんのさ！　絶対にこれは病気だよ、今すぐ里に連れて帰るから。ほらしっかりして、ひかり！」
　確かに約束はしてたけど、こんな状態で外出して来たひかりに私はこの時ばかりは心配するより先に無性に怒りが沸いた。
　自分の命を大事にしろって、あれほど言ったのにどうしてこういう事するかな‼
　けれどひかりは腕に力が入らないのか、私の腰にしがみつく事も出来ずだらんともたれかかってくるだけ。
　……あああ、全く信じらんない。治ったら今度こそ言い聞かせてやる。
　しょうがないんで背中におぶろうとした時。
　私はとんでもない事をひかりから聞かされた。
「リグル……わたし、かえれない……よ。おじさんがここに、おいてった……んだもん」
　切れ切れの声で苦しそうに呻くひかりの言葉を聞いたとき。
　私は頭が真っ白になった。
「置いてった⁉　どういう事さ、それ……」
　これまでの話から、ひかりが叔父さん叔母さんの家でどういう扱いを受けてたかは何となく分かる。
　だけどまさか幾らなんだって。
「おじさん言って……た。わるい、びょうきだって。里にいたらみんなにも、うつ……るから、すてて……くる、んだって」
　でもひかりの言葉は、その最悪の予想そのままだった。その時、私の脳裏に妖怪達の噂話が浮かぶ。今年は鼠が多いって話。そして

ひかりの話と体に浮かんだ斑点。
　そこから導かれる、頭の良くない私でも分かる簡単な結論は一つだけ。

　人間の里で疫病が出たんだ。だからひかりを捨ててった。放っておいたら里中に広まるかもしれないから。
　だとしたらひかりを里に連れて帰っても絶対に中に入れては貰えない。
　それどころか、酷けりゃその場で。
「何で……だからって……！」
　ひかりを抱いたまま、私はそのまま立ち尽くすしか出来なかった。
　人間からしたら疫病はそりゃ怖いかもしれない。でも……動物だって生きてる自分の子供を見捨てるような真似なんかしないぞ！？
　いや……考え込んでる場合じゃない。ちょっと額を触っただけで焼けるみたいな熱さだ。

　このまんま放っておいたらきっと、ひかりが死ぬ。
　ひかりを追い出した里は論外としても、人間の里だったら私が知ってるだけでも他に幾つもある。病気なんかしない私達妖怪には無縁だけど、医者の一人や二人くらいいるって話も聞いた事があるし。
「ひかり、苦しいかもしれないけど背中におぶって飛ぶよ。もう少しだけ我慢して！」
　それだけ言って返事も待たず私はひかりを背中に背負った。

　本当は落ちないようしっかり掴まってて欲しいけど、もうほとんど体に力が入らないひかりに頼むのは酷だ。落とさないようにしっかり背負わないと！
「リグル……どこ、いくの」
「私じゃ治せないから他の里まで連れてく。大丈夫、絶対なんとかするから」
　その言葉は半分以上自分に言い聞かせた物だったと思う。
　背中の重さも忘れて私は飛んだ。人間の足で歩くなら1日かかる距離でも、飛んで行けば森も川も無視できるから1時間もあれば着く。
　お金は……持ってないけど。でもきっと、こんな子供を見捨てるような奴ばかりじゃないはずだ。
　だけど……そんな私の考えは大間違いだったんだ。

「みんな来い妖怪だ妖怪！　何しにきやがった、里の中に入ってみろ叩っ殺してやる！」
　最初と二つ目の里じゃ、入口で私の姿を見ただけで大勢の人間が鎌や鍬を持って遠巻きに私達を取り囲んだせいで私はひかりを連れて逃げ出す羽目になった。
「しきたりで余所者はそもそもうちの里には入れない。まして病気持ちなんて論外だな、それも妖怪と一緒にだなんて話にもならん。

他をあたってくれ」
　三つ目の里は話だけは聞いてくれたけど、結局中にさえ入れなかった。
　私が妖怪だって時点で、人間は話なんかほとんど聞いちゃくれないってのを私は忘れてたんだ。こうして無駄に私が里を五つ回った頃には、もう空はすっかり赤く染まっていて。
「リグル……もう、いい……よ」
「全然良くないよ！　主に私が!!」
　背中から伝わってくるひかりの息遣いはどんどん苦しくなっていくし、顔や体は脂汗で服がべったり張り付いてる程だった。
　ダメだ、時間が無い。こんな状態で夜を外で過ごしたら、ひかりは明日の朝さえ迎えられないかもしれない。
　どうせ正攻法で頼んだ所で話にもなんないんだ……こうなったら……!!

　出来ればやりたくなかったけど、もう方法なんか選んでる場合じゃない。六つ目の里で、私は意を決して強硬手段に出た。
「おーい誰だぁ、こんな夕暮れ時に……。げ、妖怪!?」
　入口の前にいた里の見張りに気がつかれてすぐ、私はひかりを地面にそっと下ろして寄って行く。
　大した力の無いへっぽこ妖怪の私だけど、それでもそこらの非力な人間とは比べものに

はなんない。人間数十人が集まったら負ける程度でしかないけどさ……でもやるっきゃない！

「蟲の大妖リグルナイトバグがあんた達の里を攻撃に来たよ！　大人しく喰われたいなら私の前に立てば良いわ。だけど命が惜しかったら交渉くらいは聞いてやるから、ここの里長を呼んでこいっ！」

　普段から自分の側に纏わりついてる弱気の蟲をこの時だけは無理矢理引っ込めて、私は大声で叫んだ。

　我ながら酷いハッタリだと思うけど、幾ら下手に出て頼んだって全然ダメだったんだ。それならいっそ徹底的に偉そうに出てやる！

　見張りの人間は大慌てで訳の分かんない悲鳴をあげながら中へと走っていく。たっぷり15分くらい経ってからだと思う。

「わしが里長だ。蟲の大妖リグルとは聞かん名前じゃが……我々は無駄な争いは好まん。妖怪よ何が望みだ？」

　数人の見るからに偉そうな雰囲気の人間が入口まで来てそう言った時、正直私も驚いた。自爆覚悟の方法が上手く行くとは私も流石に思ってなかったから。

「父さ……里長、でも見た感じ大して強そうじゃないです。こっちがそんな下手に出なくても、力づくで退治しちまえば良いんじゃ……」

　だけど側にいる若い男がぼそぼそとそんな事を言うのを聞いて、思わず私の背筋に悪寒が走った。やばい、やっぱりばれてるよ！

　でも里長と呼ばれた爺さんはいきなり、その人間の頭を殴った。

「ばかもん！　勝てたとしても里の者に犠牲が出るような戦いができるか！　それに目を見る限りどうやら相当真剣なようじゃ、多分目的は別にあると見るが……どうかな」

　私の浅知恵なんかお見通しとばかりに顎鬚を撫でながら笑う爺さん。

　……ううう、バレバレだ。でも話を聞いてくれるんならこの際なんでも良い。

「この子を診てあげて欲しいんだ、そして出来るんなら治してあげて。……嫌だって言うなら……！」

　でも一度始めたハッタリは最後まで貫き通そう。

　言葉の後で私は出せる限りの妖気を出して周りの人間を威嚇する。爺さんの側にいた人間たちが一気に脅えて後ずさったけれど、やっぱり爺さんだけは私の実力を見抜いてるのか身動き一つしなかった。

「なるほどの……気持ちは分かった。薬師の香之真を呼んでこい、診て貰いたい娘がいるからすぐ入口まで来いとな」

　爺さんの言葉を聞いて、側の男が駆け出した。

「…………ありがとう」

「わしは薬師じゃないでな、必ず治せると保障はできん。それにしても妖怪が人間の子供を助けて欲しいと頼みに来るとは、長生きはするもんじゃ。だが……脅す方がそんな簡単に頭を下げとったら芝居がばれるぞ？　ん？」

　軽く肩を竦めた爺さんを見ながら、私はこの時素直に嬉しかった。

「ひかり。もうちょっとだから頑張って」

「……うん」

　弱々しいけれどひかりはそっと私の手を握り返して笑った。

　だからきっとこれで何とかなると私は思った。疑いもしなかった。

　そして息をきらせてやって来た薬師の人間に私はひかりを預ける。でも熱を見たり舌を出させたりした後、薬師は服を捲ってすぐ顔を上げた。

「妖怪、この子はどこに住んでるか分かるだろうか」

「え？　そこの森を抜けた向こうの大きな川沿いの里だけど」

　里の名前なんか分からないけど、場所を簡単に説明する。けれど、私の返事を聞いてすぐ薬師の人間は見てはっきり分かるくらい血相を変えた。

「里長大変です。黒死の疫です」

「……なんだと！」

「今年は暖かいせいで鼠を多く見かけたから気になってたんですが……すぐに手を打たないといけません。病の出た場所からは離れてるのでまだ間に合うと思いますが、一度広

がってしまえば終わりです」
「分かった。これから里の者総出で鼠を集めて焼き殺せ、里の外への出入りもこれから一月程度は一切を禁じさせる」
　私やひかりをほったらかして、勝手に話が進んでいく。
「え？　ちょ、ちょっと……病気の名前なんかどうでも良いからさ、ひかりを……」
　爺さんや薬師に私が手を伸ばしてすぐ、私の手は思いっきり払われた。
　しかも人間達は私達の側からさえ一気に離れていく。私を見ても全然脅えなかった爺さんでさえ。
「ちょっと待って！　この子を……ひかりを見捨てないでよ!!」
　私は芝居も忘れて駆け寄ろうとした。だけど、その時見張りの人間が私に向けて槍や弓矢を構えたせいで私はそれ以上動けなかった。
「すまんの蟲の妖怪……。もしその子を連れて我々の里に入ろうとするならば、わしらはどれだけ被害が出ようとも戦わねばならん。妖怪には無関係でも、それは人間には最悪の疫病でな……治す方法は無いんじゃ。……残念だがその子はもう……諦めてくれ」
　爺さんは私とひかりに一度頭を下げてから後ろを向いた。
　なんだよ……用は何もできないって事じゃないか。同じ仲間だろ、人間同士なんだろ！　どうしてそんな事いうんだよ!!　だけど私が一歩前に出た途端、見張りから矢が飛んで来たかと思うと私の頬を掠めて後ろに抜けていった。少し遅れて、攻撃された事に私の頭が追いつく。
「この……！」
　何故だろう。言いたい事は分かるのに、どうしようもなく腹が立った。
　人間たちと、そして私自身に。
　頭にかぁっと血がのぼったまま、この時の私は後先なんか考えないで里で大暴れしてやろうと……本当に思ったくらいに。
　だけど爺さんの次の一言で、私の頭も背中も全部が一気に冷えた。
「退いてくれんかの。次は本当に狙わせる、それもお主ではなく背中の娘を」
　その言葉に私は今度こそ、一歩も動けなくなった。
　私だったら人間の撃った矢なら五本六本刺さったって気合いと根性で何とかなる。だけどひかりは、そういう訳にいかない。
　それどころか、ここにこのままいるだけでも撃ってこない保障なんかもう無いんだ。
「……ばかやろぉ!!」
　ひかりを背負ったまま、ありったけの声で叫んで私はその場から離れた。
　でも半分以上は自分に向けた声だ。人間のことは人間に相談すればきっと何とかしてくれるなんて思った私が……馬鹿だったんだ。
　それに何もしない人間と、何も出来ない私と……何が違うんだよ。
　空からはもうすっかり陽が落ちていた。多分すぐに夜になる。夜になってから妖怪が里を訪ねて入れてくれるとは流石に私だって思えない。
　これから私は、ひかりに何をしてあげれば良いんだろ……。
　だけどそんな時、背中のひかりが私の首筋をつついた。
「……ひかり？」
　振り向いてすぐ私は目を剥いた。
　もう頬の辺りにまで黒い斑点がいくつか浮き出ていたんだから。そして触ってみてすぐ分かった。昼の時よりも熱がずっと高い。
「……リグル……。私……お水が、のみたい」
「分かった。近くの川まで連れてくけど良い？」
「……いつもの、所が、いいな」
　そう言うひかりの目はどこかぼんやりしてて、焦点も合ってなかった。不意に私は本能的に悟った。蟲達の最後を一杯見てきた私だから分かる。
　ひかりに残った時間が、もうほとんど無いんだって事を。
「そっか。ひかりはあそこが好き……だもんね。ちゃんと、掴まっててよ？」
　バカ、泣くな私。
　今泣いたらきっと動く気力も何もなくなる。それに私が泣いたって絶対にひかりは喜ばない。だから泣いちゃ駄目だ。

服の裾で目を擦って無理矢理涙を引っ込めてから私は飛ぶ。私ができる事は、もうきっとそれしか無いから。

（最終話に続く）

〈作者コメント〉

ども、はね～～です。

私を良く知ってる一部の方は想像してたかもしれませんが3話構成のはずが見事に4話構成になりました。ううう、我ながら計画性の欠片もない……（汗）

既に最終話原稿はほとんど完成しており、後はもうクライマックスの瞬間をどう描くかだけ（つーか方針は最初の時点から決まってる）なのですが……作者自身が書いててもう果てしなく鬱です（お）

今回は歌の由来とひかりの可愛さをどうやって（リグルの出番を食わずに）書くかにひたすら苦心させられました。……ちゃんとできてれば良いんですけど（汗）

最終話、どうか最後の最後まで一人でも多くの方が見て下さると嬉しいです。では……！

はね～～＠東Ｌ－53a　Ｆｅａｔｈｅｒ'ｓ　Ｓｎｏｗ

リグル・ナイトバグ

著者：夜行

ふと考えた。
私って何なんだろう？
私って何なんだろう？
ふと考えたんだ。
・・・・
「あんたバカぁ？あんたは妖怪よ。少なくともあたいよりは弱いけどね！」
・・・・
私は妖怪だ。
弱い妖怪だ。
でも妖怪はいっぱいいる。
妖怪は私だけじゃない。
私って何なんだろう？
・・・・
「リグルは蟲でしょー。違うのか⁉」
・・・・

私は蟲だ。
蟲の王様だ。
でも蟲はいっぱいいる。
王様もいっぱいいた。私だけじゃない。
私って何なんだろう？
・・・・
「うーん、飲み友達、かな？　あんたお酒弱いけどね」
・・・・
私は友達だ。
ミスティアの飲み友達だ。
でもミスティアの友達は私だけじゃない。
チルノもルーミアもミスティアの友達だ。
私だけじゃない。
私って何なんだろう？
・・・・

「リグルちゃんはやっぱりリグルちゃんじゃない？他の誰でもない、リグル・ナイトバグ。私はそれで十分だと思うな」

・・・・・

私はリグルだ。

リグル・ナイトバグだ。

弱い妖怪で蟲の王様でお酒に弱いリグル・ナイトバグだ。

リグルは私だけだ。

他に誰もいない。私だけだ。

私だけが、リグル・ナイトバグ。

私だけの、リグル・ナイトバグ。

なんだかよくわからないや。

でも何でだろう、ちょっぴり嬉しいな。

（終）

〈作者コメント〉

初めまして、夜行と申します。

月間 NIGHTBUG 創刊の知らせを聞いてから、自分も何かできないかと考えた挙句に中途半端な詩みたいなものを書いてみました。

拙い文章ですが、迸るこのリグル愛に免じて暖かい目で見て頂ければ幸いです。

リグルとリグラー、リグリエーターの同志達へ愛を込めて。

リグルレース

著者：くろと

曇天だ。曇天の下で色彩が踊っている。

それは弾幕の花びらで、あたり一面に咲き誇っている。そして、弾幕に惹かれたように妖怪が被弾する。

「キャっ！」

「ミスティア！」

また一人、友人が地上へと堕ちていく。

「くっ！」

リグルたちは遭遇してしまったのだ。全てを喰らい尽くすという亡霊に。

「桜色の悪魔……！」

「どうするウサ？　このままだと全員胃袋の中で再開する事になるウサ」

「とりあえずその微妙に腹立つ語尾から直そうよてゐ。友達無くすよ？」

「そーなのかー」

話しているのはルーミアと因幡てゐだ。

ただ、リグルとは違い、どちらにも余裕がある。実に不思議な事だ。

「とにかく逃げよう！　せっかくミスティアがエサ……じゃなくてミスティアの犠牲を無駄にしない為にも！」

リグルはマントをなびかせて、宙を飛ぶ。

雲を突き抜け直線の飛行機雲を残し、曇天を突破する。

その速度は素晴らしい。の一言だが、妖怪ならばさほど珍しい速度ともいえない。事実、後ろから二者の妖怪も追いついている。

だが、それ以上の高速もある。

「！」

地上に生える木々の深緑が揺れ動き、地上で何かが疾走している事を伝えてくる。

「くっ、追いつかれる……？」

「ピンチなのか⁉」

「これって日ごろの行いが悪いからじゃない？」

「アンタにだけは言われたくない！」

軽口な因幡を一喝し、地上に向けて弾幕を飛ばす。

「ムダだって。相手は六面ボスだよ？　一面ボスが束になっても勝てないって」

因幡の言葉は正しく、地上から反撃の弾幕が昇ってくる。

それは蝶とも桜とも取れる形の弾幕をしていた。

「ほら」

因幡がケラケラと笑った。

どこからその余裕が湧くのか聞きたいところだ。勿論、そんな暇は無い。

「っ！」

被弾すれすれをグレイズし、逃げ切るためにより高い空へと昇る。

「速さが足りませんねぇ」

どこかの新聞記者の様な声が響いた。

「あ、居たんだ烏天狗」

因幡が分かりやすい表現で述べた。

カメラで写真を撮りながら、黒い一対の翼を生やした少女が傍を飛んでいる。

幻想郷最高最速の烏天狗だ。

烏天狗は楽しそうに取材の手帳を取り出

し、
「はい。白玉楼の主が暴走したと聞いて取材の為にすっ飛んできました」
「だったら本人に聞いてくれれば？」
　因幡がきっぱり言い放ち、間髪居れずに烏天狗に弾幕を飛ばす。
「おっと危ないですねぇ？」
　烏天狗が容易く避けて距離を離す。
　だが、距離を取った烏天狗に因幡はにやりと笑みを浮かべた。
「貴女は鳥だからね！　焼き鳥にすればきっと美味しくなるよ！」
　なぜか烏天狗ではなく地上に向けて叫んだ。
　すると地上からの弾幕が途切れた。
「あれ？」
「まさか……！」
　リグルは状況を理解出来ず、烏天狗は状況を理解した。
「！」
　烏天狗の黒翼を地上からの弾幕が掠めた。今のは明らかに標的を絞った弾幕だった。
「あやや、もしかして四面楚歌ですか？」
「虎穴に入らずんば虎子を得ず、ってね。ほら、大好きな取材に行ってきなよ！」
　因幡が躊躇わずに追撃を続ける。
　なんという兎。とも思ったが大事なのは自分の身だ。
　今だけは保身に走ろう。
「私たちの為に堕ちてください！」
　心の中で謝罪してから蟲の弾幕を展開する。
「くっ！　ですが、その程度では私には通じませんよ！」
　小さな竜巻が巻き起こった。烏天狗が起こした小型台風である。
　その竜巻が烏天狗に差し迫った弾幕を掻き散らし、烏天狗に再び余裕を取り戻させる。
　それが命取りであった。
「そーなのかー！」
　ルーミアが月符を展開していた。
　撃たれたムーンライトレイが烏天狗の左右を遮った。
「ですから、その程度では……って、え？」
　違う。ルーミアの狙いはそこではない。
　ルーミアの狙いは、弾幕軌道の確保だ。
「なっ！」
　烏天狗の位置が地上に居る亡霊から直線となった。
　ムーンライトレイによって行動の範囲が絞られた。そして、左右に動けないならば白玉楼の亡霊にとってからすれば格好の的だろう。
「！」
　烏天狗に地上からの弾幕が直撃する。
　被弾は一瞬で済む。
「っよし！」
　思わず両手を組んでガッツポーズを決めてしまった。
　だが、隣の因幡は渋い顔で舌打ちし、弾幕をやめなかった。
「え？」
　何故止めないのかが分からない。亡霊を足止めするエサなら地上に堕ちたはずだ。
（まさか）
　弾幕の隙間に相手が見えた。
「甘いですね」
　烏天狗は、堕ちていない。
　嘘。直撃したはずだ。間違いなく被弾したはずだ。
　どうして堕ちていないのか、その理由を烏天狗が分かりやすく告げた。
「ですが私に喰らいボムをさせた事は評価します」
　喰らいボム。一秒以下の判断を必要とする、弾幕の高等技術だ。
「ついて来られますかね？」
　因幡の弾幕が届く前に烏天狗が、一気に雲上を突き抜け上昇した。
　烏天狗が突き抜けた雲からは日の光が零れた。
　思考が追いつかない。それほどに早く、気付いた時には遥か彼方の位置に居る。
　カメラを揺らす烏天狗が変わった形の団扇を取り出した。アレは何か、と思考を巡らし、答えが出る前に指示が来た。
　指示は因幡の声で、
「リグルは地上に弾幕！　ルーミアは闇を広げて視界を！」
　鋭い言葉に体が応答し、指示された行動を

する。
　いや、行動をしようとした。
「遅いですよ！」
　今度は、小型ではなかった。
　烏天狗が振った団扇から、曇天を吹き飛ばす程の竜巻が生じた。それも下に向けて発生した。
「うそ……？」
　慣性を無視するほどの強力な竜巻である。小物妖怪では対処の仕様が無い。
　大型台風に巻き込まれた気分を味わいながら、リグルたちは地上へと落下した。

□

「っ！」
　リグルが目を覚ました。それは随分と早く、けれど遅くも感じる。
　どうやら自分は生きているらしい。
　頭を強く打ったのか、それとも落下の衝撃か、視界がうっすらとボヤけている。
　ここはどこなのか、と考えて、
「……」
　目前、歩いて十歩ぐらい先に居る女性に気付いた。
　着物を着付け、傍に幽霊を纏わせる肌の白い女性。
　すごく白玉楼の主に似ていた。
　いやまって、おちついて、と自分に言い聞かせる。まだ、そうだと決まったわけではないし、そうだと思いたくも無い。
「そうだっ、ルーミア！　てゐ！」
　一緒に堕ちた友二人の名前を挙げるが、何処からも反応が無い。
　そして目の前に居るのは白玉楼の主に瓜二つな女性だ。
　全身からドッと嫌な汗が流れだした。
「え、えへ、私、たぶん何かの用事があるから！」
　後退りで着物の女性から距離を離す。
　すると女性が一歩を詰めた。
　そうして離した分の距離を詰められた。
「い、イヤだなぁ、冗談なんでしょ？　ね？　ね！」
　最後の語尾が大声になっていた。というより大声で喋らないと不安になる。それとも不安だから大声で喋るのだろうか。
　いずれにせよ着物の女性は着実に接近している。面白いほどに接近している。
「……」
　近づく着物の女性が小さく呟いた。
「な、なに……？」
　聞き取れなかったリグルは思わず聞き返してしまった。
「……」
　そうやって一歩前に立った着物の女性が、もう一度呟いた。
　今度ははっきりと聞き取れた。その内容はシンプルな一言だった。
「おいしそうね」
　足が竦んでしりもちを着いて、意識が白へとトんだ。
　その先は、よく覚えてない。
　楽園の巫女が動き出したのは烏天狗が文々。新聞が発行した後だという。

（終）

〈作者コメント〉
　最初はグルメを書こうとしたんだ。そしたらなぜかこうなったんです。えと、なんだか知らないけどごめんなさい

- ADDA
- foxtrot
- 熾天使
- KAGOKAGO
- 草葉
- 天。
- 涼音 奏
- まるく。
- たーく
- キッカ
- ZT
- P.0
- オワタ
- Jade
- てつ

▶ 一日差で 6月号投稿を逃しました。お休みが 16日なので…
精神なしにお休みを過ごしたら描く時間もいつのまにか消えました.
結果的に初号よりクォリティーが落ちるようになったしorz。
次の番は頑張ります。来年までもずっと続けたら, あの時こそストーリーあることを…

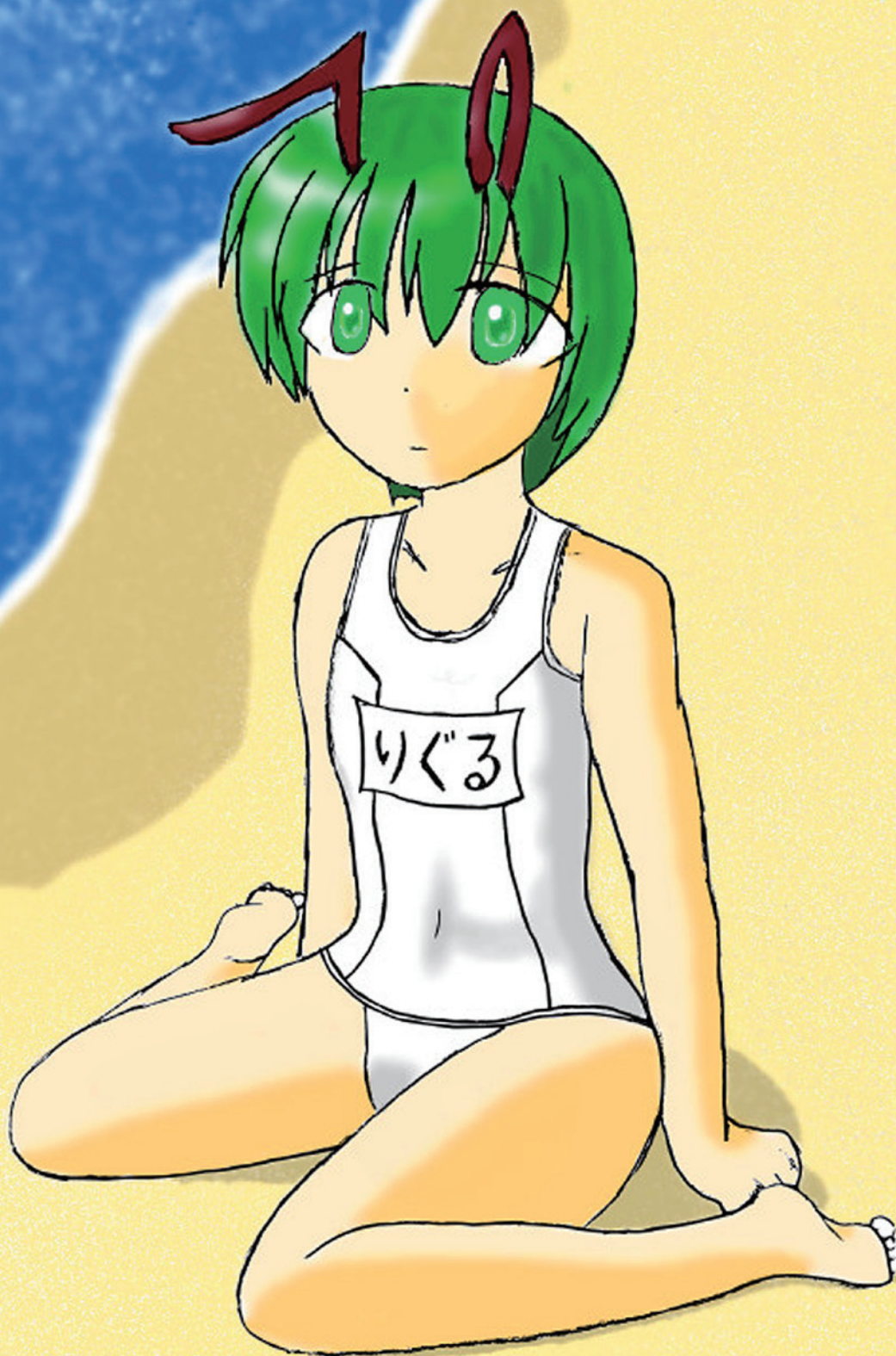
▶ 時をかける少女（関係無い）。
やっぱり蛍は夜に活動していなきゃいけません、夜へ行きましょう。
なんとなくトリオザパンチっぽい背景。

▶ 公の場に投稿するのは初めてになります。ああなんか恥ずかしいな・・・
途中で路線変更したらリグルがちょっと成長してしまった・・・
線画がうまく書けない・・・　精進します。

▶ 絵を描いているのにパソコンが止めました.
これがトラウマになって絵が描かれなかったです...
[リグル! ラブ!]を叫びながらあたふた描いたのがこれです...
クォリティーがたくさん落ちましたよね... 次には力を出してに描いて見ます!

▶ 大ちゃんとかリグルとか好きだからー！

▶ リグルこそ全てにおいて幻想郷一ィィ！！ですね＾∪＾みなさんももっとリグルを愛しましょう！
pixivはコチラです→ http://www.pixiv.net/member.php?id=171631

ここ何年か天の川を見た記憶がありませんが、幻想郷なら綺麗に見られそうですよね。
そして蛍を見た記憶もないのですが、そこはリグルに頑張ってもらいたいとこです。　--http://rshk.uijin.com/

▶ 今回の絵の完成にあたり、自分一人だけではここまでの作品ができなかったと思います。
ボディラインのチェック、色彩やペイントソフトについて長い時間をかけてご指導していただいた炭屋さん他、
絵をチェックして頂き改善点を教えていただいた練習中チャットの皆様
そして、今この絵を見ている方に感謝します！

七夕

▶ 初めまして。
７月号ということで七夕ネタで攻めてみました。
初めてリグルを描いたのですが、今まであまりかわいいと思わなかったのですが描いてみると意外とかわいい奴でしたｗ
また心の余裕があれば、投稿したいと思います。

▶ そろそろ蛍の季節ということで、蛍です。うちの近くでは見られませんが。
遠出して見に行こうかしら。

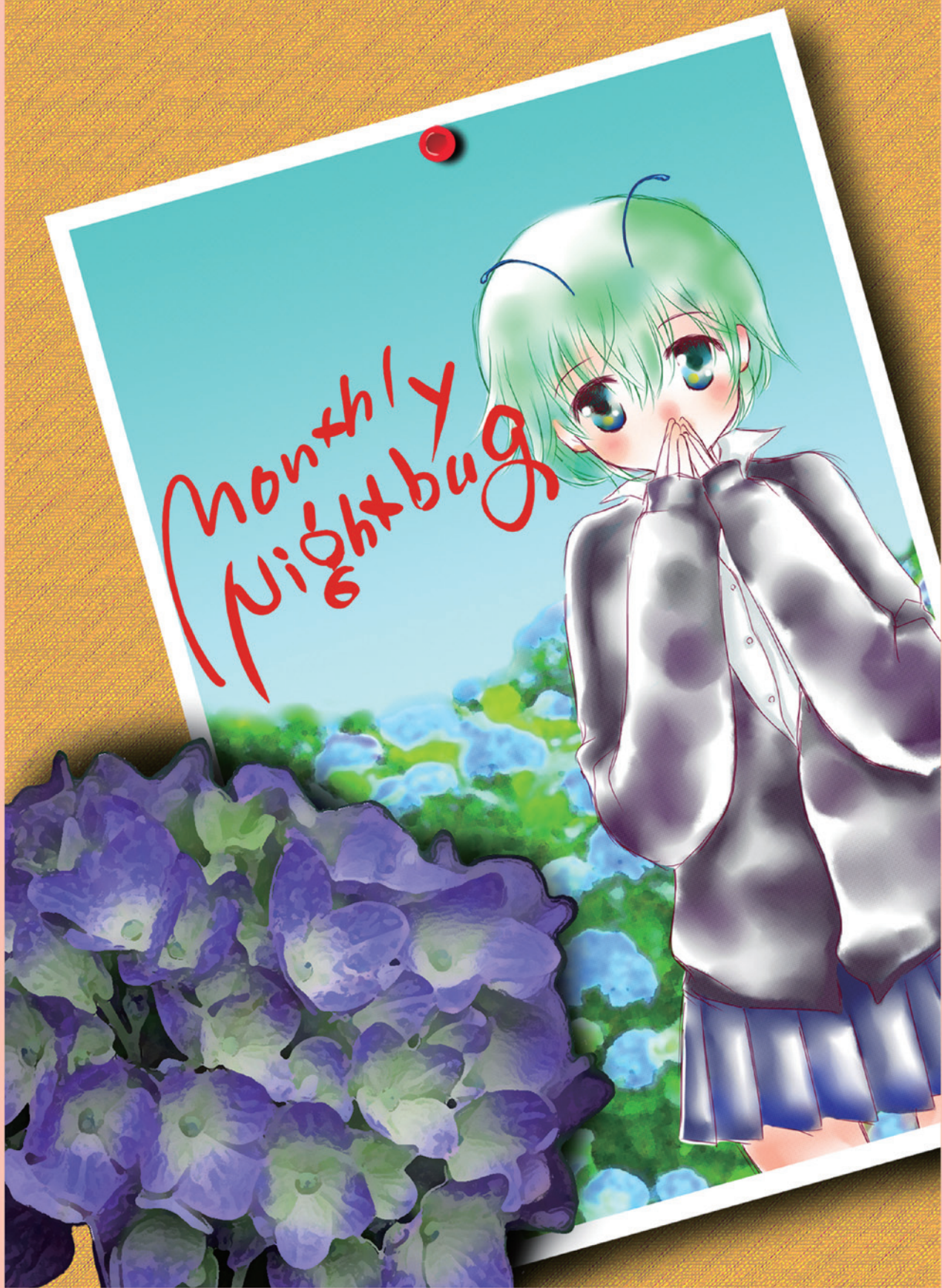
▶ そろそろ蛍の季節ですね。

▶ はじめまして。月刊ナイトバグに投稿するためにお絵描き練習初め、ねんがんの初投稿させていただきました。
今更メンナクネタなのは、多分最近読んだラノベのせい。
pixivで練習用絵垂れ流してます。id=6683

オワタ

浴衣りぐるんも良いと思う

▶ 7月といえば夏祭り★！グルメなんて知らないわ！………すいませんでしたァッッ！

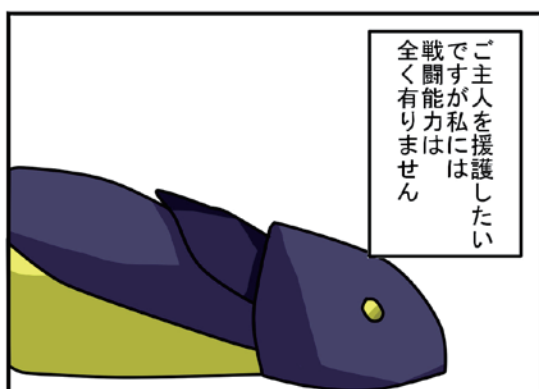
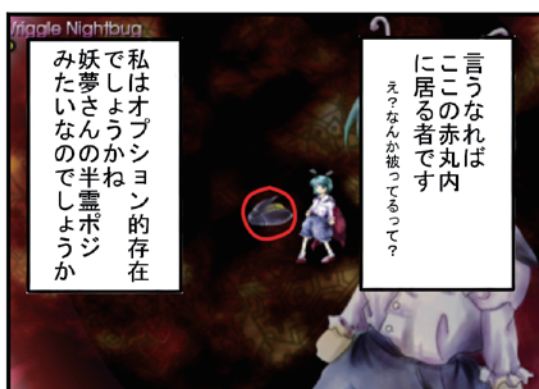
リグル=地上の恒星 七月=七夕 なイメージで描き始め…た　わけでは全く無く、ド素人芸が失敗に失敗を重ね、紆余曲折の末ギリギリこの形に不時着しただけでございます。ホントはもう一人居たんですが諸事情乙。織姫がリグルだと彦星は……あれ？鳥さん？捕食ひええむしろリグルが牽牛星？誰が女の子だこのry 今回リグル神小崎様のご企画に投稿できる喜びに震えつつPixivに細々と生息中の一元粒子による拙い作品でした。

▶ 7月号ですがリアル梅雨真っ只中なので。リグルは制服が似合うので制服特集がある日を夢見ています。

リグル達の七夕

描いたひと：怨羅悪

作者の周りにも10枚くらい書いてるのが居た
と思う

もしもリグルにオプションが居たら・・・

ごめんなさいもう七夕関係ないです

ごめんなさい。また幽リグです。

そして右上へ…

楽屋ウラ的なにか。

描いたん：草加あおい

パチュリグな日々
東
話って何？
えっと、あの…
その…
どうしたの？
はっきり言わないと
分からないわ
その…ブ、ブ…
ブラ…
ブランカ？
じゃなくて
もじ
もじ

ブラジャーを
付けてみたい…？
わ、私も一応
女の子だし
そそろそろ胸がふくらんできた
ような気がして…それで…
え？
そうかなぁ…

その…
こんなこと頼めるの
お姉ちゃんだけだから

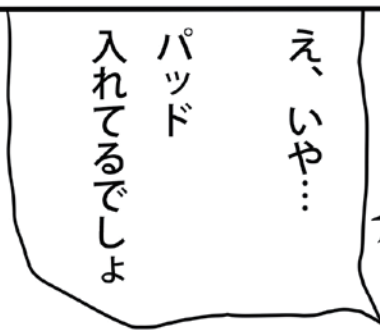
ドキ

となると…

…あなたの話は分かりましたが
はっきり言ってもいいですか？
あなたにはまだ、ブラジャーは
必要ないですよ

ええ！？

ど、どうかな？

ばーーん

気にしなくていいのよ

胸の大きさなんて

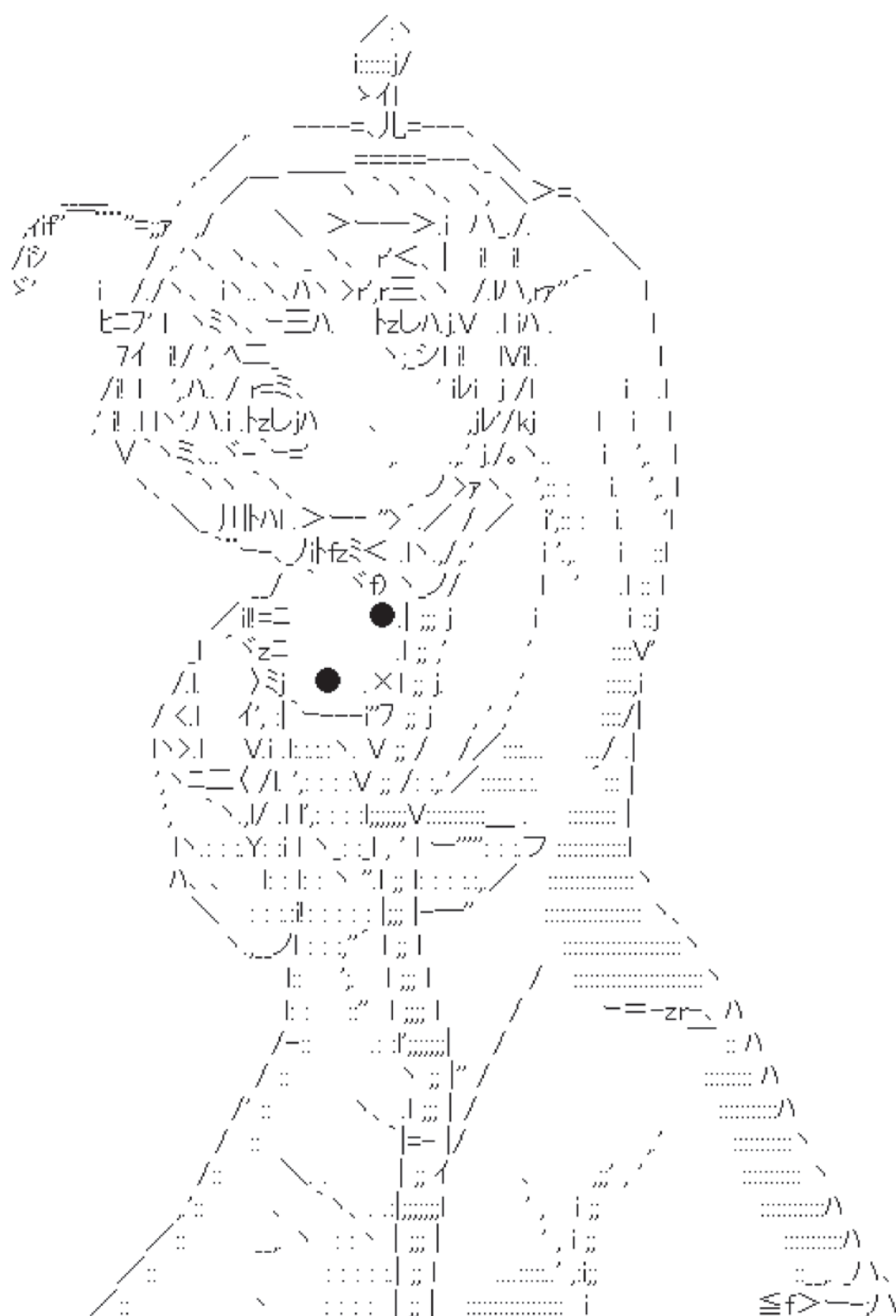
胸の大きさだけじゃ
リグルの魅力は
測れないもの
リグルにはリグルの
いいところがいっぱいあるじゃない

そ、そうかなぁ…？

貧乳もステータスですよ！

おわり

タイトル：合羽リグル　／　作者：図隅

※txtファイルを以下のＵＲＬにて公開しています。是非ご覧下さい。
http://wriggle.nightfall.jp/waa0907.txt

①その虫にとって 肩は亀 死体は使命。どんな虫？

②その虫は麻雀やポーカーをするとよく上がるが トップになることは少ない。どんな虫？

③その虫は16ヶ月毎に 出てくる。どんな虫？

④その虫は今まで何かを 見たことがない。どんな虫？

⑤その虫はせんたく物を干してから 数時間後に現れる。どんな虫？

答え：①タガメ→タガメ ②安い手→ヤスデ ③五季振り→ゴキブリ
④未だ見たことがない→未見ず→ミミズ ⑤数時間後乾く→かわく→蚊

リグリグ日記

著者：神楽　祐希

「警告！　警告！　非常用ハッチより脱出せよ！　繰り返す、非常用ハッチより脱出せよ！」

　私の耳にも届く大きさの音と共に、チルノちゃんの機体が落ちていく。

開幕に大妖精がやられたからこれで二人目・・・・

　いや、さっきルーミアもやられたって情報が入ったから、これで3人目か。

残っているのはミスティアと私だけ。

　考えてみたら、もとから可笑しかったんだ。

　仲良しって理由だけで、ミスティア・ルーミア・チルノちゃん・大妖精・私。

それに対して向こうは、霊夢・魔理沙・紫。

人数では勝っていた。

　だから五分五分と言われて納得してしまった。

　でも、こんなの勝てるわけない・・・・・

どこからかやってきた、三姉妹の演奏で戦いが始まったとたん、めちゃくちゃな太さのレーザーが目の前を掠めた。

　魔理沙だ。あの魔理沙が、始まった瞬間、恋符「マスタースパーク」を放ったんだ。

一撃で大妖精の機体は制御不能になってしまった。

　命があっただけで奇跡みたいなもの。

　でも、その後の戦いはは善戦といっていい。

　やる気のない霊夢、結界を張ったとたんに寝だした紫を尻目に、4対1で魔理沙と戦っていた。

　それでも、相手が悪すぎた。ルーミアがやられ、今チルノちゃんも落ちて行っている。

ミスティアも今や機体の制御で精一杯。

　出来ても逃げる程度で攻撃なんか出来るわけない。

　私だって似たようなもの・・・・・

たった一回の恋符「ノンディレクショナルレーザー」でピカピカだった機体はボロボロに。

　それでも、諦めずにスペルを放った。

チルノちゃんを攻撃していて隙だらけの魔理沙目掛けて、「季節外れのバタフライストーム」を放ったんだ。

　でも、霊夢と紫が結界を張ったら意味が無い。それに結界を張った途端に疲れた顔して賽銭の額を数えだすし、またすぐ寝だすで流石に傷つく。

　けど、あの2人の結界なんて私には逆立ちしても破れない。

　あれ？　こんなのこ考えていたら目の前にレーザーが・・・

　また、恋符「マスタースパーク」・・・・

何回打ってるの?と言いたくなる。

　すぐに機体が光に包まれる。チリチリと嫌な音がして、機体が崩壊していく。

　警告の音が五月蝿い。私はここまで・・・

後はミスティアの無事を祈るしかない。

　そうして、機体が崩壊すると同時に私は現

実世界に戻った。
　そこには悔しそうな顔をするチルノちゃん、まだ気絶している大妖精。それに、何も考えていなさそうな
　ルーミアが居る。
　チルノちゃんが私に気づくと、いきなり怒りだした。
「なんで、あの時、魔理沙をやらなかったのよ？
　あたいの最強伝説に傷がついたでしょ！」だって。
　でも、霊夢と紫のことを説明したら納得してくれた。
　そりゃ、勝てるわけなんもんね。
そんなことを話していたら、いつのまにかミスティアが戻ってきた。
　聞くところによると、あれから散々な目に会ったらしい。
　ミスティアの帰りを皮切りに、魔理沙達も帰ってきた。
　あっ、ちょと汗かいてる。私、頑張ったよね。
　なんて思っちゃうくらいに、ホント一方的な戦いだった。
　勝って機嫌の良い魔理沙が
「明日はこっちのやろうな。こんどは、山の神様とかも呼んでもっと大勢でさ」
　とか言い出したので、私は、今度は負けないよ、と心に決めた。
　けど、魔理沙の家の地下室も案外良い物が置いてあるんだね。
　いまやった、ヴァーチャルインベーダーは中々だったし、今後は暇なら見に来ようかな。
　それからは、霊夢の家に場所を移しての宴会だった。
　歌のお兄さんが登場したときはビックリしたけど、後はいつも通り。
　ミスティアの手料理はいつ食べも美味しいし、さっきの戦いを忘れるには十分な盛り上がりでした。

　今思ったけど、こんなこと日記に書いても誰が見るのかな？
　今度、チルノちゃんとかと交換日記してみようっと。

～リグル・ナイトバグの日記より抜粋～

（終）

〈作者コメント〉
　もう、何もかもが初めての投稿です。深夜に寝れなかったのが執筆の理由だったり・・・皆さんにも、そういう時ってありますよね？
　あら？　もしかして私だけ・・・・

冒険者なヒトたち外伝（そとづて）

あっきゅん道場第一話　～ただし魔法は尻から出ない～

著者：ハンダゴテ

阿求（以下あ）「と、言う訳で！」

リグル（以下リ）「あっきゅん道場はじめました！　完」

あ「――で本当に終わるのはさすがにどうかと思うのでとりあえず続けますが」

リ「まーさすがにねー。いくらなんでもねー」

あ「でもやっぱり止めますかー」

リ「なんでさ！」

あ「いやだってー。質問募集したのに一個も無いしー。やる気なくして解説なしゲストもなしですよ。あ、どーも。稗田阿求です」

リ「リ、リグル・ナイトバグです。……いやでもさ、やると言った分はやろうよ」

あ「んー、でもねえ？　疑問も無いってことは興味も無いってことでしょ？　世界観とか事の真相とか、いくらでも質問できるようにしてあったんだから」

リ「確かに意図的に隠してある部分は見え隠れしてたけど……それは後々明らかになることなんじゃないの？」

あ「なりませんよ？　ネタバレですもん」

リ「ネタバレなのに明らかにならないってどうゆうことー!?」

あ「あー、つまりですねえ……いいやもう。どうせ興味ないんでしょう？」

リ「途中まで言いかけたんなら言おうよ！」

あ「実は……『冒険者なヒトたち』には『月刊ナイトバグ』連載分の後のストーリーがあったんですよ。その為の布石だったり単なる日常だったりが『月バグ』のお話でして。ある程度続いたら書く事も考えてたんですけどねー」

リ「じゃあ書けばいいじゃない」

あ「気安く言うなよ蟲。どれだけ労力使うと思ってんだコラ」

リ「ひぃっ！　ご、ごめんなさい」

あ「『月バグ』とは違った意味で疲れるんですよ。……ドシリアスだし。リグルさん死ぬし」

リ「死ぬの!?」

あ「正確にはちょっと違いますけどね。でも一番深刻なのはアンタだ。……連載分にもそれに付随して消える要素がいっぱい。酒呑童子と百鬼夜行とか。九天使とか。五行の体現者とか」

リ「消えるって……どういうこと？」

あ「そのまんまですよ。来月から投稿なくなりますから」

リ「……………………………………

……えぇ!?」

あ「あー、五月蝿い五月蝿い」

リ「ちょ、ちょっと！　投稿なくなるってどういうこと？　聞いてないよそんなの！」

あ「ほい作者メモ」

リ「『雛とかメディスンとか出したかったなー。ヤマメとにとりも出したかったなー。魔理沙とアリスも出したかったなー。映姫と紫も出したかったなー。以下、延々続く』

………」
あ「バァン！」
リ「な……なんじゃこりゃあ！」
あ「まーどのみち私は出ませんからね、どーでもいいです。東区区長の一人娘で実家は極道、特技は居合切りという設定まで出来てるのに。極道よーわからんという理由で出番無しです」
リ「そ、それはまた……。しかし質問無かったくらいでなんでそこまで……別に書き続けることは出来るじゃない」
あ「無理して続けても性も無いエゴだからねえ」
リ「同人なんてそんなもんじゃないの？」
あ「だからですよ。エゴだから、無理してまでヒトんちで続ける必要は無いんです。別に一人抜けたところでどうこうなる企画じゃないってのは先月までで実証済みですし。一人だけ別世界で浮いてますし。それに半端に引き込んでも辛いだけですよ、このお話は。ならさっさと切り上げた方が良い。そういった意味でも丁度いいんです、このタイミングは。進むか、止めるか。それを決めるには、ね」
リ「でも……お話自体は続けるんでしょ？　自分のホームページで公開するとか……」
あ「しませんよ？　そんなことしたら後半から一話一人死ぬじゃないですか」
リ「なんでそんなもの凄く伝わりにくいネタを使うのさ⁉　というかなんでそんな荒（すさ）んでるのさ⁉」
あ「あーみんな死ねばいいのに」
リ「自分の不満を理不尽に他人に押し付けた！　人間として最低だこの人！」
あ「ケッ。妖怪に人間語られたくねぇですよ」
リ「うわあああ！　なんかこっちがムカつくぅ〜！」
あ「まあそんな一人で転げ回ってるリグルさんはほっといて。ちょっと製作の裏話でもしましょうかね、折角（せっかく）だし」
リ「――しなくてもいいページ稼ぎをしている」
あ「はーいそこちょっと静かにしてー。
　初めに『月刊ナイトバグ』に投稿する予定だったお話は、萃香さんがリグルさんに修行を積ませる、というものでした。世界観も原作のまま、ギャグ気味にテンション任せで突っ走りつつ、リグルさんがいないときに考察を交えた真面目シーンをやる、というものでした。こちらはいつか書きたい鬼の話に繋がる予定でした」
リ「でも二話目を書こうとしていきなり挫折したんだよね」
あ「こりゃ駄目だー、と。ネタも続かないし。そんな訳で書き続けられるものを、と思っていっそ世界観をオリジナルにしてしまえー、と。んでもってやっぱ明るい雰囲気で書ける物をー、みたいな感じで一週間で出来たのが『春になると出てくる紅いアレ』の前編です」
リ「とは言っても、これも行き当たりバッタリなのは変わんないんだけど」
あ「ある程度の構想は出来てるんですけどね。考えてるものに限って時間が足りない気がするっていうか……」
リ「投稿当初は隔月も考えてました」
あ「最近はホント隔月じゃ無きゃ無理かもって思えてきました。うん、でも人間やりゃ何とかなるよ？
　そうして以前考えていたネタと今作の世界観が結びつき、リグルさんたちを核にした壮大なストーリーとそれに付随する『月バグ』連載分の構想が出来上がりました」
リ「でもさ……作者のＰＣに入ってるメモを見ると、何か私より各話のゲストキャラの方が主役っぽいんだけど。というか私の登場すら危ぶまれる話がチラホラあるんだけど」
あ「『冒険者なヒトたち』ではリグルさんは脇役ですよ？」
リ「えぇ⁉『春になると出てくる紅いアレ』を見る限り主役私じゃん！　メインの視点だってそうだし、一番喋ってるのも多分私だし……」
あ「アレは例外。最初だし。リグルさんがあの世界で主人公になれるのは『月バグ』連載分の後の話です。まあ連載がなくなった今となっては永久に叶わぬ話ですが」
リ「そんな……毎話出てくるのに脇役なんて……」
あ「ぶっちゃけリグルさん以外の話の方が面白いし」
リ「ええええぇ！　それ一番ここで言っちゃ

いけない台詞だろう!?」
あ「というかリグルさんを活躍させようが無いんですよね。スペルカードの設定も原作と違って条件付きのものになっているんですが、これがポンポン気軽に撃てるモンじゃないし。特にリグルさんの場合は使用する度に悲惨な結果に……」
リ「うう……シリアスモードで無いと撃てない＝『月バグ』での使用無しだもんなあ」
あ「作者お得意の激重シリアス展開は人を選びますからね。『月バグ』ではなるべく避けようって方向で書いてます。まあ、おかげで最近欲求不満のようですが」
リ「病気じゃん、それ」
あ「ホントねえ。こんなあっちこっち顔出してないでとっととシリーズ物の続き書けよって感じですよね。冬頃に出すとは言ってますが、間に合うものも間に合わなくなりますよ？　夏の原稿だって危ういのに」
リ「イベント近づくと他の原稿に手がつかなくなるからなあ。……ていうかこんなに脱線してて良いの？　既に所々読者を置いてけぼりなんだけど」
あ「いいんですよ。小説なんて読み飛ばされるモンなんですから」
リ「諦め過ぎでしょう!?　色々と」
あ「人間諦めが肝心って言うしー」
リ「その使用法はダメ人間の言い訳だー！」
あ「まあそんな訳で、結局行き当たりバッタリで書いてるけど、一応ちゃんと構想はあるんだよってお話でした。もうどうでもいいけど」
リ「ムリヤリ締めたー！」

あ「とまあ、そろそろいい加減に行きましょうかね」
リ「……本当にもうお終いなの？」
あ「先ずは嬉しい事だと言いましょうか。この企画に投稿側として参加できた事に」
リ「――イベント参加してから影響され過ぎだアンタ」
あ「お祭り的に参加したつもりが新しいネタも思いついてしまいましたしねえ。――とまあ、終わるかどうかですが、こればかりは問うてみないと分かりませんね」
リ「問う？　誰に？」
あ「蛍灯に誘われた者達に。――とまあ、そんなキザったらしい台詞は置いといて。リグルさん、実は私ね、初めからこうするつもりだったんですよ」
リ「え……？　投稿を直ぐに止めるつもりだったってこと……？」
あ「ええ。そりゃ求まれる限りは続けていきたかったですけどね。目を背けることもできたけど、私は自分からキッカケを作ってしまった」
リ「…………」
あ「結果なんて初めから分かってたんです。それでもちょっとだけ期待を抱いて、考えていたことを実行に移した」
リ「…………」
あ「私は自分で自分を突き落としたんです。こんな余分を挟まずにいつも通り自分勝手に作品を書いて自分勝手に投稿していれば、こんな結果にはならなかった。でもね、リグルさん。私はひょっとしたら、この結果を待ち望んでいたのかも知れない」
リ「え……？」
あ「――私が本当に悲観していることはね。あの掲示板での交流があまりにも希薄だということなんですよ」
リ「そんなに……少なかったかな」
あ「ええ。私はそう感じました。書き込みが行われるのは公開直後の二～三日間。せいぜいちょっと遅れての感想を一週間後、くらいです。その後次の公開までの期間、ほとんど書き込みは無しです」
リ「でもさ……そういうもんなんじゃないの？　ダウンロード数自体はかなりあるって話しだし……まだ始まったばかりだし。それに作品の続きを待ち望んでる人だってきっと……」
あ「リグルさん。――伝わらない言葉に、意味はないんですよ」
リ「…………」
あ「どんなに願ったって、どんなに焦がれたって、ちゃんと言葉にして伝えなきゃ、何処にも行きはしないんです。――私はそれを、昨年の十月に知りました」

リ「………」
あ「口で人は殺せるけど、無口でも人を殺すことは出来るんです。それが今でも、私の心に後悔として残っている」
リ「………」
あ「ひょっとしたら、こんな私にも向けられている想いは在るのかも知れない。求められていることは在るのかも知れない。……でもね、私にはそれを知る術が無いんです。だからそれは、悲しいけれど無かったことと同じになってしまう。――あの時の、私の気持ちのように」
リ「………ねえ、阿求」
あ「少しばかり未練が過ぎましたかね。それではこれで、あっさりさっぱり幕を引くとしましょう。ああ、ご心配なく。私は離れる訳ではなくて、ちょっと立ち位置を変えるだけです。迷惑だろうとなんだろうと、最後まで見続けてやりますよ。
　それでは一先ずさようなら。その光が絶えないことを祈っていますよ、『リグルさん達』」

――それは、誰の言葉？

――『稗田』の言葉ですよ。

（終）

〈作者コメント〉
　テーマ投稿は無理でした。くそう、咲夜さんが居れば……！
　片割れが阿求だったのはリグルイの所為ではありません。いや影響はあるだろうけど。理由を言ってしまうと色々都合が悪いので察して下さい。あとネタが分かり辛くてごめんなさい。読者置いてけぼりにも程があるよ自分。

リグルとあの景色

著者：MAL

　どんな夢を見たんだろうか。あいにく夢の内容は一つも思い出せない。
　代わりと言うのはおかしいがどこか懐かしさを感じさせる景色を思い出した。
　よく澄んだ青空、どこまでも続いていると思わせる大草原。やがて夕暮れになり一面がカボチャ色に染まる。
　そんな景色を私はどこで見たのかわからない。忘れてしまったのか、はたまた勝手に作り出してしまったのか。

＊＊＊

　このところ夕暮れになるとあの景色が思い浮かぶ。
　家の中のたった一つの窓をリグルは眺めていた。しかし窓から見える景色は森だ。記憶の中の景色とは全く違う。

　ドンドン。

　家の戸を叩く音が聞こえた。その音を聞いたリグルは現実に戻されたような感覚を味わった。
「はいはーい。いますよー。誰ー?」
「ミスティアだよ。あとルーミアとチルノもいるよ」
　リグルが戸を開けると仲良く三人が立っていた。三人の手には酒とおつまみが握られていた。
　その様子を見たリグルが小さめの声で言った。
「えーっとここで宴会?」
「うん」
　チルノの無邪気な声はいつもより大きく聞こえた。
　中に入るや否やミスティアは酒の蓋を開けて自前のコップに汲み始めた。次に酒を汲むためにルーミアはリグルの家のコップを勝手に取り、いすに座ってミスティアが汲み終わるのを待っていた。
　チルノはベッドに寝そべり左手を突き出していた。こうしているとコップと酒が手に入ると思っているのだろう。世の中、とくにリグルの家の宴会はそんなに甘くないのだ。
　ルーミアが汲み終わったのでリグルもお気に入りのグラスに酒を注いだ。チルノはようやく気付いたらしくコップをリグルから貸してもらい自分で酒をよそった。しかし行動が遅かったのでテーブルの周りの三席はすでに取られていた。チルノは仕方なしにベッドに腰掛けた。
　みんなのコップに酒が入ったのを確認してからミスティアが一度咳払いをして、その場

の注目を集めた。それを確認してから大声で言った。

「じゃあ、今日も楽しく飲みましょう！」

＊＊＊

突然の宴会は参加者全員リタイヤで幕を閉じた。

リグルはいつものように床で、ルーミアとミスティアは机に伏せながら、いち早くリタイヤしたチルノは特等席のベッドで寝ていた。

床にはチルノがこぼした酒が異臭を放っていた。相当酔っていたのでリグルはそんなことには全く気がつかず、いつものごとくベッドで寝ているチルノに腹を立てていた。

そろそろ朝日が昇る頃だった。うっすらと夜空が後退していく。だが誰も目を覚まさなかった。

時間が経ち、日が真上に昇る頃にようやくチルノは目を覚ました。

チルノは大きなあくびをした。その後周りを見渡したが起きているものはいなかった。下を見るとリグルが寝ていた。ちゃんとそれを確認してからチルノはベッドから下りた。

はずだった。

「うっ‼」

まだ酔いが残っているせいかチルノはリグルを踏んでしまった。へその近くにチルノの全体重がかかったリグルの腹は言葉にならないほどの痛みが走り、それ故だんご虫のように丸くなった。

「ごほっ、ごほっ。し、失敗ってふざけるな！」

「あー、失敗」

リグルは痛みに耐えながらゆっくりと立ち上がり、戸を開けて外に出ようとした。

「えっ、どこ行くの？」

「適当にうろつくだけ。いつ帰ってくるかわからない」

素っ気無く言うとリグルはそのまま外へ出て行った。チルノは目を丸くしてそれを見つめることしか出来なかった。

＊＊＊

外は気持ちのいい晴天だった。今頃自宅では二日酔いに苦しんでいるのだろう。と思ったがリグルも二日酔いをまさに今、体験していた。

家を出てから数分で喉が渇いてきた。リグルは近場にきれいな水が汲める場所を知っていたので迷わずそこに行く事を決めた。

そこは妖怪の山の麓。山頂から流れる川の水は澄んでいてとてもおいしいと妖怪の中で有名だ。肝心の川の場所はもう忘れてしまったので耳を澄まし水の流れる音を頼りに川を探した。

今日は雑音がいつもより少ない。妖怪達があまりいないからだろう。リグルは少しおかしいと思ったがたいしたことではないのであまり気にしなかった。

音だけを頼りに歩き回ること数十分。ようやく水の音がした。期待に胸を膨らましそこに行くときれいな水が流れていた。

リグルは手でその水をすくい、おもむろに口に飲んだ。

「んっ、ぷはぁ。水はやっぱり天然水に限るよ」

水の透明度と同じく味も研ぎ澄まされた感じがした。これはおいしい。

「そういえばもう家に溜めていた水が底に尽きてたっけ。明日あたりにもう一度ここに行くか」

つい嬉しくて大きな声で独り言を喋ってしまった。誰もいなかったのでよかったがとても恥ずかしかった。
　その後川辺にある大きめの石の上に座り、リグルは少し考え事をした。
　今は自宅以外のどこかに行きたい。でもそう簡単に暇をつぶせる場所がない。そしてここは妖怪の山であるから山頂を目指そうにも天狗が怖い。でも麓は紅魔館があって……あれっ、ここって麓だよね？
　リグルは自分の得た知識がおかしい事に気付いた。声に出して一つずつ物事を確認してみた。
「ここは妖怪の山の麓。紅魔館は妖怪の山の麓にある。そして霧の湖も妖怪の山の麓にあるはず。でも今見ている川はこのまま霧の湖に流れているわけではなさそう。……ここって本当に妖怪の山？」
　これ以上頭をひねって考えても答えは出なかった。その代わりここが妖怪の山かを確認するいい方法を思いついた。それはとりあえずこの山を登ってみることだ。なぜなら妖怪の山は天狗で警備されている。天狗がいるということは妖怪の山ということだ。
　リグルは川の流れから判断して山を登っていった。こういった登山は久しぶりかもしれない。いつもは虫を統率する者としての立場上こういった虫の多いところに来ているが実際にそれ以外の私用ではあんまり来ることがないからだ。
　登っている途中でよく踏み均された道を見つけたのでそれに沿って歩いた。もうそろそろで山の中腹だろう。だが一向に天狗の現れる気配はない。さらには妖怪の気配もあまりしない。
　山の中腹に差し掛かると今まで道を暗くしていた木々が急に姿を消すようになった。とても違和感があったが前へ進むうちにそれは消え去った。
　小規模だけど目の前に広がるこの緑の畑。ここだけ傾斜がなく平たくなっていて、日の光で明るい。それはまるで絶景スポットのようだった。
「きれいだなぁ」
　リグルはその光景に心を奪われた。近くで見てみると緑の畑を作っている植物が何かすぐにわかった。
　それは大量の鈴蘭だった。
「鈴蘭があるってことは……ここって無名の丘か。ってことは妖怪の山の向かいの山を登ってたのか。どおりで妖怪達があんまりいないわけだ」
　何歩か後退してこの光景を見つめた。鈴蘭の毒で倒れるのだけはごめんだ。
「んっ？」
　リグルは何か思い当たる節があったらしく鈴蘭畑の周りを歩き始めた。
　しばらくするとリグルは立ち止まった。そしてあごに手を乗せてそこからの光景を眺めていた。
「ここから少ししゃがんで手で見える範囲を狭めるとこの鈴蘭達がどこまでも続いているように見える。何か、こう、……あー、何考えてたか忘れた！」
　リグルは自慢の短い髪をくしゃくしゃにしながらその場に立ちすくんだ。

＊＊＊

「まだ帰ってこないわ」
　リグルの家の周辺を探したルーミアは声のトーンを落としながら言った。他の二人も不安の色を隠せない表情をしている。
「無理やりここで宴会したのが悪かったのかな？」

「……あたいが……あたいが今朝……リグルを踏んだから……それで、それで」

　まるでリグルが死んだかのようにチルノは目に大粒の涙をうかべながら話した。周りの雰囲気もチルノにつられて暗くなってしまった。

　一瞬の沈黙を経たのち、ルーミアが外を眺めながら言った。

「もうそろそろで日が暮れるのにまだ帰ってこないわね」

「やっぱり……あたいの……あたいのせいだ」

「チルノのせいじゃないよ。リグルには放浪癖が昔からあって、ほら、たまに家からいなくなるのもその放浪癖のせいで――」

　ミスティアは必死にチルノをあやしたがチルノは一向に泣き止まなかった。ルーミアが加勢しても結果は変わらずチルノはいつまでも目を擦る。その純粋な瞳はとうとう真っ赤に染まってしまった。

＊＊＊

　リグルが家を出たときは明るかったが今になって少しずつ暗さを感じるようになってきた。

「もうこんな時間か」

　このまま数十分すればすっかりここも暗闇の中に入るだろう。まださっきまで考えていたことを思い出すことが出来ない。

　意固地になってこの鈴蘭畑を見続けた。いつかは思い出すことが出来ると信じていた。ずっと無理な体勢をしていたので足がしびれて尻餅をついてしまった。その衝撃で考えていた事を思い出した。

「あー！　ここってあのよくわからない懐かしい景色だ！」

　大声を出しながら鈴蘭畑を指差した。リグルがそのことの確信に至ったのは数分後、いわゆる夕暮れだった。

　それはもう思わず息を呑むような光景だった。記憶の中の景色とは違いその自然の優雅さが直に伝わってくる。リグルが知っている景色の中では比べ物にならないほど美しかった。

　突然、リグルの目に映る光景がセピア調で見えてきた。この鈴蘭畑はもちろん、空も、大地も、何もかもが自分の持つ特有の色を失っていった。

＊＊＊

　この無名の丘は以前から活気に溢れていなかった。もっと昔はまだ妖怪やら人やらが近づいていたと言うのは知っているが少なくとも私が来たときはそうではなかった。

　初めて私がここに来たとき、今日のように妖怪の気配はあまりなかった。そしてここにたどり着くや否やこの光景に心を奪われた。当然、次の日にも行こうと思っていた。

　次の日はここに来るのが遅かった。日が暮れる少し手前だった。日が暮れたらあの光景が見られなくなる。と急いでここに来たのだ。

　息を切らしながらようやくこの場所に着いたとき、偶然にも時間は夕暮れ時だった。カボチャ色の鈴蘭畑を見たことでさらに私はこの光景が好きになってしまった。

　その次の日も、さらに次の日も。毎日欠かさず私はここに足を運んでいた。

　ある日、私がいつものように日が暮れるのをここで待っていると一人でぽつんとたたずむ人影を見つけた。私は誰なのかを確認する為にその人の近くまで歩いていった。

　私が近づくと気配を察してかその人は私の方を向いた。そして口を開いてぼそっと言った。

「あんた妖怪だろ？」
　その言葉に全くの力を感じなかった。そんなことよりも妖怪の目の前で動じない人間はそう滅多にいない。それが私が持った疑問だった。
「あなたは人間？」
「ああ、正真正銘の人間だ。いきなり人間に襲い掛からない弱気な妖怪さん。ここの鈴蘭畑、この角度から見ると草原のように見えるから見てみたらどうだい？」
　私の身長なら少ししゃがんだ姿勢でいいらしい。その人が場所を開けたくれたので私はそこからその姿勢で鈴蘭畑を見てみた。
　確かに一面の草原のように見える。しかし左には山がある右には木々がある。せっかくの草原なのにこう言った無粋な物は消してしまいたい。
「その様子じゃ横にある山が邪魔だと思っただろ。そういう時は手を使って見える範囲を少しだけ狭めればいいのさ」
　見える範囲を狭めるために目の横に軽く手を添えてみると見事に山が消えた。そして見える光景はまさに一面の鈴蘭の草原だった。
「落ち込んでいるときによくここに来て、いつもこの光景で癒されるんだよな」
　初めてこの人の言葉に重さを感じた。今までの言葉に声量はあったのだが芯の強さが全くなかった。
　その後お互いに鈴蘭畑、いや鈴蘭草原をずっと見ていた。多分二人とも夕暮れになるのを待っていたのだろう。
　好きな事をしているとすぐ時間は過ぎるのはまさにこのことだった。あっという間に夕暮れが訪れた。
「ほら、弱気な妖怪さん。このチャンスは逃すともったいないよ」
　先ほどと同じく少ししゃがみ、手で見える範囲を制限して鈴蘭草原を見た。
　夕暮れが染めたこの草原はずっと見ておきたいほど美しい光景であり、植物が持つ生命を感じ取れるかのようだった。
「あなたも見ないの？」
「いえいえ、昔はそうやって見ていたけど最近腰を痛めてしまって見れなくなったんだ」
「そう、折角見れるのに残念」
　私は再び鈴蘭草原を見た。次第に夕暮れが丁寧に染めた色が黒という一色に変わりつつあった。
…………。ついに日は沈み、月明かりだけがこの草原を照らしていた。
「じゃあ今日はこの辺で、今日はありがとうございました」
「あっ、別に礼はいいよ。水臭いだけだし」
「ところであなたはまだ帰らないの？」
「んっ、ああ。まだちょっとだけ見ておきたいんでね」
「そう……、ではまた会えたらそのときも一緒に見ようね」
「そうだな。また会えたらな」
　私はその人を残して鈴蘭草原から去っていった。
　その次の日、再び私がそこに行ってもあの人はいなかった。また次の日もいなかった。ここはあまり妖怪が立ち寄らないと言えども危険だった事を今思い出した。
　さらに次の日、その事を段々後悔し始めた。あのとき、あのまま妖怪の闇討ちに遭って帰らぬ人となったんじゃないかと。
　一日、また一日と時間が経つにつれ心の隅にあるわだかまりが大きくなっていくのを感じていた。
　何日経ったのかわからない。今日も欠かさず鈴蘭草原に来た。今日はあの日と同じく一人でたたずむ人影があった。

のはわかるが念のため近寄って確認をした。

まず性別が違った。前の人は男だったのに対し今回の人は女だ。その女は私が背後に来たにも関わらずこっちを振り向かなかった。私以外の妖怪だとまず死んでいる。

とりあえず気付いてほしいので軽く声をかけた。

「あのぉ」

「えっ、ひゃあ！　妖怪！」

私の声を聞くなり甲高い声を上げてその女は尻餅をついた。

「ちょっとお尋ねしたいんですけど。鈴蘭草原……あっ、いや鈴蘭畑が好きな男の人を知りませんか？」

「誰か助けてください。誰か助けてください。誰か助け……」

その女はさっきまで取り乱していたが私の言葉を聞くなり段々と冷静さを取り戻していった。

「あなたなんで私を襲わないの？」

「私は弱気な妖怪ですから」

「弱気な妖怪なんてそんなのいるわけないじゃない」

「ここにいますよ」

女はとっさにくすくすと鼻で笑った。よほど滑稽だったのかそのまま必死に声を押し殺して笑っている。

「さっきの質問ですけど鈴蘭畑が好きな男の人を知りませんか？」

「あなたが言っている人か知らないけど一人だけ知ってるわ」

さっきまで笑っていた女が急に笑うことを止めた。そして真剣な顔をした。

「その人、たまに鈴蘭畑に行くの。いきなりいなくなるから私はいつも驚いているわ。そして何もなかったかのように日が暮れた後に帰ってくるの。日が暮れた後は妖怪が盛んな時間だから危ないのに。少し前だったかしら、あの人がまたいなくなったの」

話しているうちに徐々に言葉が濁ってきた。顔をよく見ると真剣な顔というより物寂しい感じがした。

「また日が暮れたら帰ってくるだろうと私は待っていたの。そしたらその日、あの人は帰ってこなかった」

女は言い切った後に顔を下に向けた。そして話を続けた。

「あの人、今日になってもまだ帰ってこないの」

女の震えた声を聞くと私が持つ心のわだかまりはいつしか罪という存在に変わっていた。

「ねぇ、教えて！　あの人はどこなの！　どこなの！」

必死に私に問いかけている。女は答えを知っている。でも自分の心に嘘をついていた。私は何を言えばいいかわからなかった。重苦しい雰囲気の中、私は声を震わせながら答えた。

「その人は私が……殺しました」

私は真実を言えばいいのに嘘をついてしまった。それにより女の顔から血の気がさっと引いたのがわかった。

「私は悪い妖怪で殺した事をその人の大切な人に伝え、絶望させるのが趣味です」

明らかに今の私の言葉には心がこもっていない。だがたった今、裏切られたばかりの女がそれに気付くはずがない。

「何が弱気の妖怪よ。いいわ、私も殺して。殺してあの人の下へ行かせ……て……」

どうしていいかわからなかった。これで罪が逃れれるわけはない。そんなことはわかっていたのに。

気がついたら私は弱りきった声を出している女を根絶やしにしていた。私の細い腕には強く握られた跡があった。

私は後悔はしている。私は女を悲しませたくなかったが、その気持ちよりあのときの罪を償いたい気持ちが大きいから引き起こした。その結果ここには墓を模した土の山が二つある。これも償いの一つだった。

＊＊＊

セピア調だった鈴蘭畑がいつの間にか色を取り戻していた。しかし日はとっくに暮れていて月明かりだけがこの鈴蘭を照らしていた。

「あっ、もうこんな時間か。そろそろ帰ろうか」

最後に振り返って鈴蘭畑を見た。その光景は多分あの人が最後に見た光景と同じだろう。

闇が染めた深緑のカーテンと灰色の斑点。あの人はこの光景で何を思ったのか。リグルは帰り道にこのことだけを考えていた。

リグルはようやく自宅が見えるところまで来た。案の定明かりは点いている。

リグルは一つ、大きな深呼吸をしてからその戸を開けた。すると中から異臭が外に広がってきた。

「うわっ、この家臭っ！」

「あっ、どこでこんな遅くまで油売ってたのよ」

「ほらっ、チルノ。リグルが帰ってきたよ」

「ふえっ、リグル！　今朝はごめんね。本当にごめんね！」

「えっ、あっ、あのことなら別に怒ってないよ。それより……」

リグルは口をもごもごさせていた。不思議そうに残りの三人はリグルを見つめた。

「私の友達になってくれてありがとう」

リグルが言った後誰もが返答に困り、愛想笑いを余儀なくされた。リグルはしまったと額を手で覆った。

あの人があの光景を見て思ったことは結局私にわかるはずがなかった。でもあの経験があったからこうして私には大切と思える友達がいるのだと。あの人は無知な私にそれを教えてくれたかもしれない。

あの鈴蘭畑には私の友達とその友達の大切な人が眠っている。今まで怠っていた墓参りをこれからしていこうかと思った。

（終）

〈作者コメント〉

初めましての人は初めまして、ＭＡＬです。鈴蘭って見ごろは5月までだってよ。しかもメディスンがでてなかったよ。とか季節感は前回同様なしです。これ書いているときに悲しくなったりしました。こんなこと実際にはあってほしくないです。

ようこそ、ここは貴方を埋める為のページ、
略してあなうめ
八月号のテーマ特集は「ホラー」です。

無題

草加あおい

p72〜p73

(イラスト)名札ゼッケンがないのは邪道だとは思いますが。
お胸の具合を楽しんでくだされば幸い。
(４コマ)こんなゆうかりんはイヤだ。

表紙

小崎

持病の意味の無いポーズを描いてしまう病の発作が…。
救一心。救心。裏表紙が間に合わず表紙の使い回しです。
救一心。救心。

パチュリグな日々

東

p74〜p79

創刊号以来のパチュリグ。胸がなくてもリグルが好きです。胸がないのを気にしちゃってるリグルはもっと好きです^p^

合羽リグル

図隅

p80

ここだけの話小説書こうと思ってたけどネタが纏まりきらなかった。にゃふん。

リグなぞむし

mimidori

p81

ぜんぶ　とけたら　おとうさんや　おかあさんに　もんだいを　だしてみよう　！
小学一年生とか二年生とか、そんな感じの雑誌のノリで楽しんでいただければ幸いです。

ゲルセミウム・エレガンス

わぶ

p99

幽「あげる」ヽノ「わーありがとうございます」・・・
幽「ところで貴方も蟲なんでしょう？草は食べるの？」
ヽノ「僕はホタルなのであんまり」幽「あら……そう………」
ヽノ「？」―――――　幽香さんが鬼畜すぎた。　切り絵です。
カラー切り絵にしようと思っていましたが間に合いませんでした。
orz　そしてリグルが幽香さんの胸を凝視しているように見える罠

漫画・自由作品、表1〜表4　作者コメント

今度のリグルは超ツヨカワイイの(はぁと)

mimidori

p2

誰もが一度は思いつくネタに色々混ぜて全力投球してみました。
リグル「いってきまぁ〜す(棒)」幽香「必ず死なす！(怒)」
ヤマメ「ウェーッハッハッハ(泣)」

りぐるん！

の一と

p4

チルノがリグルを呼ぶ場合は「リグるん」、その他のキャラがリグルを呼ぶ場合は「りぐるん」。俺の中でそう決まっているが、その違いは俺にもわからん。

パッチェさん元気ですね

羅外

p5

グルメ特集に参加しようと思っていたのに、何故かこんな漫画に……。引用部分は岩波文庫（藤沢令夫訳）になります。

蟲の手帖

HOUSE

p27〜p32

夢オチならぽっちゃりを描いても許されると思った。
今はもっと肉を盛っておけば良かったと反省している。
そのうち自サイトにオマケや作品の補足も置く予定です。
よろしければ遊びに来てください！
web検索→黄色い地球儀

リリかる☆りぐるのすわっと一品

言示弄

p33

母親が昔よくやってくれたんだですが・・・卵の巣篭もりとか言うらしい。で、
描き終えてから調べてみたら、結構出てくる（しかもこんなしょーもないのじゃ
なくて、しっかりしてるのが一杯）。周囲の人が知らないからいけるかな？
とか思っちゃったんだよ。　・・・知ってた？　これ。巣篭もり。知ってたら
ごめんなさいorz　でも旨いよ！　味に飽きたらお供を変えればいいだけだしね！
リグルの服は・・・まぁセンス不足なのはわかってるさ・・・これから頑張る。うん。

無題

草加あおい

p34〜p35

お題を出してみてはどうでしょうという言いだしっぺが全然テーマに沿っていない件。切腹。

make a cook

毒粗

p36

これもしやルーミアが食べればなんでもうまそうに見えるのではないのかと思いました(^q^
グルメっつーか調理実習みたいになっちゃいました、夏コミでこんなかんじ？のリグルxルーミアの合同誌配布する予定ですー。どうぞよろしくお願いします(宣伝)

リグると！

ひどぅん

p37

妖怪は人間の姿に擬態してるんだから人間の行為もマネできるわけで、食事とかアレやそれも問題無し！だと思う。
たぶんね！

コレハヒドイ

戌亥

p38

思ったよりグルメ的な良いネタが浮かばなかったので、一発ネタな作品になってしまいました。一発ネタって作品名を付けづらいです。

リグル達の七夕

怒羅悪

p70〜p71

引き続き投稿のどらおです。
「達」と銘打ってる割には3人しか描いてませんw
画力向上の短冊の主は言うまでもなくワタシです。
そして変なキャラ捏造してすいませんでしたw
それでは、失礼しました。

月刊ナイトバグ　2009年7月号

2009年6月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

じーかーんーがーなーいー……時間がないっ！？
……、はっ、しまった！　これは、私の出身のS市H高校演劇部限定のローカルネタだった！　小崎です。

と、手段や挨拶を選ばないほどに追い詰められた今回の編集なんですが、結局、今月も自分の作品を載せられなかったわけで。やはり、現状私の力では、悔しいですが編集だけで手一杯かなぁと感じるところです。
あぁ、じーかーんーがーなーいー……エロリグル描いてたら時間がないっ！？
……。
えっへっへっへ　いやいやいや　カチカチカチ……ええ、すいませんでした。
とはいえ、実際時間不足はかなり厳しいとこでして。どうしたものかなぁ……。
と、手段や改行を選ばないほど追いつめられた現在時刻は、21日23時●●分でございますよー。ヤバいい。

……よし、そろそろいいだろう。待たせたな。泣きごとに見せかけた行埋めは終わりだ！
さて、今月号から試験的にスタートしたテーマ投稿は、初回から難易度の高いお題だったと思いますが、積極的に参加して頂ける方が多く良かったと思います。（途中から別方向に旨いい話になってたけど）
なんといっても、バーガータワーの破壊力はやばかったですね、今月のお題を出したとき、読者の皆様が腹を空かせるようなやつを！などと呼びかけましたが、結果、私の夜中の編集にクリティカルでした。やったぜ！

また、テーマに関連して、今月の投稿の中でいくつか、「テーマのネタが浮かばないので通常投稿で…」という風に書かれてるものがあったのですが、テーマ（特集）については、あくまで１つのコーナーと考えて頂ければ良いかと。無理をして特集の方に送ることはないし、逆にそればっかりになっちゃうのもつまらないと思うので、そこら辺は自由に選んで参加してください。
で、来月号のテーマはホラー特集でございます。稲川●二も四八マンも絶叫の恐怖ネタお待ちしてます。尚、恐怖の味噌汁と悪の十字架はＮＧワードでお願いします。それでは皆様、どうぞ次回も良いリグルを。

2009 / 6 / 22　小崎

次号8月号は7月22日（水）発行予定！

※次号投稿締切は7月15日(水)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG 2009年7月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

草加あおい
貴キ
モ誠幹
毒粗
言示弄
ara
くらげん
戌亥
ひどぅん
緑
凡用人型兵器
HOUSE
小崎

ADDA
foxtrot
熾天使
KAGOKAGO
草葉
天。
涼音 奏
まるく。
たーく
キッカ
ZT
P.O
オワタ
Jade
てつ
社 蛍夜
夜行
神楽 祐希
はね～～
壁々
くろと
夏樹 真
ハンダゴテ
MAL
わぶ
mimidori
図隅
羅外
東
のーと
怒羅悪